

山梨市文化財調査報告書 第35集

# 大工北遺跡・堰間遺跡

—主要地方道甲府山梨線バイパス工事に伴う発掘調査報告書—

2020.2

山梨市教育委員会  
昭和測量株式会社



## 序

本書は主要地方道甲府山梨線バイパス工事に伴って行われた大工北遺跡および堰間遺跡発掘調査の報告書です。調査地の位置する八幡地区は八幡条里と呼ばれる条里プランがよく残っており、調査地周辺にもその痕跡が残っています。調査は908㎡の範囲を4区画に分け、山梨市教育委員会が①区の調査を行い、②～④区については昭和測量株式会社が調査支援を行いました。

調査では条里に関係する明確な遺構は検出されませんが、①区から溝を4条、③区からは旧道跡などが発見されました。

最後になりますが、山梨県峡東建設事務所及び調査支援をいただいた昭和測量株式会社の皆様をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます、序といたします。

令和2年2月

山梨市教育委員会  
教育長 澤田隆雄

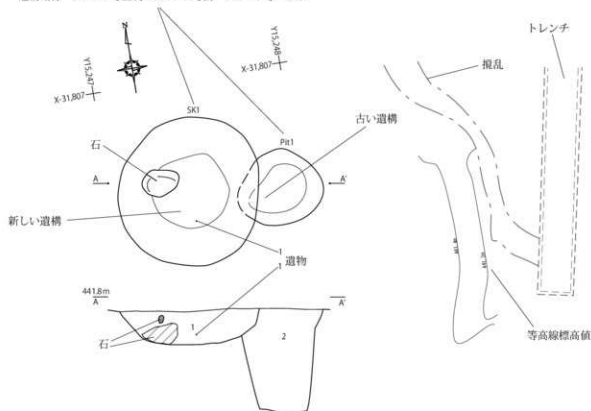
## 例 言

1. 本報告書は、山梨県山梨市堀内 22-3 外に所在する大工北遺跡・堰間遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は防災・安全社会資本整備交付金事業主要地方道甲府山梨線バイパス工事に伴う発掘調査であり、山梨市教育委員会が実施し、昭和測量株式会社が調査支援をした。
3. 調査は山梨市教育委員会生涯学習課の雨宮弘聡が担当し、昭和測量株式会社の高野高潔、浅川晃一が現地調査及び整理作業の支援を行った。
4. 本調査に関わる費用は山梨県峡東建設事務所が負担した。
5. 発掘調査は令和元年5月7日～令和元年8月2日にかけて実施した。整理・報告書刊行業務は令和元年8月～令和2年2月まで実施した。調査面積は908㎡である。
6. 報告書の執筆は、第1章を雨宮・高野、第2章を浅川、第3章を雨宮・高野、第4章第1節を高野、第2節を雨宮、第3～5節を高野、第5章第1節を雨宮、第2節を高野が担当した。全体の編集は高野が行った。遺物写真撮影は高野が行った。
7. 挿図使用地図は、第2図：大日本帝国陸地測量部発行の1/20,000地形図甲府近傍一号「七里村」(明治43年7月鉄道補測発行)、二号「勝沼」(明治43年7月鉄道補測発行)、四号「八幡村」(明治43年7月鉄道補測発行)、五号「石和」(明治43年4月鉄道補測発行)、第3図：国土地理院発行(平成14年6月発行、令和元年5月発行)の数値地図25,000(地図画像)「甲府」所取「塩山」である。
8. 遺構平面図のXY座標値は平面直角座標系(世界測地系)第Ⅷ系の値である。方位記号は方眼北を示している。遺構断面図の数値は標高である。座標値、標高の単位はメートルである。
9. 本調査における図面・写真・遺物はすべて山梨市教育委員会で保管している。
10. 発掘調査および遺物の整理においては次の方々にご指導と御協力を賜った。感謝の意を表したい。清水芳彦(山梨小学校非常勤講師、甲斐条里研究会、甲斐国研究会)、山梨県峡東建設事務所、原正人、フルーツ山梨農業協同組合(順不同、敬称略)

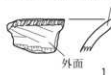
## 凡例

1. 遺構・遺物の挿図縮尺は、各挿図中に記載した。
2. 写真図版の縮尺は任意である。
3. 立面図・土層断面図の水糸レベル数値は海拔高を示す。
4. 土層断面図、遺物観察表中の色調は『新版標準土色帖 1990年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づいた。
5. 遺構・遺物実測図の表現については下図の通りである。

遺構略称 SK1：1号土坑 SD1：1号溝 Pit1：1号ピット



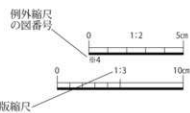
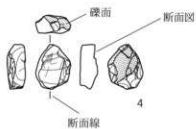
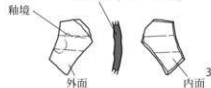
土器・土師器・陶器・磁器・ガラス（断面：白）



須恵器（断面：黒）



灰釉陶器（断面：灰色）



# 目次

序

例言・凡例

目次

## 第1章 経過

第1節 調査に至る経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第2節 調査の目的と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第3節 調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

## 第2章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

第2節 歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

## 第3章 調査の方法

第1節 調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

第2節 基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

## 第4章 調査の成果

第1節 調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

第2節 ①区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

第3節 ②区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

第4節 ③区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28

第5節 ④区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33

## 第5章 まとめ

第1節 ①区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

第2節 ②区～④区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

写真図版

## 挿図目次

第1図	調査区全体図	3	第13図	②区出土遺物(1)	26
第2図	調査地の位置	5	第14図	②区出土遺物(2)	27
第3図	周辺の遺跡分布	6	第15図	③区遺構(1)	30
第4図	基本層序	10	第16図	③区遺構(2)	31
第5図	①区遺構(1)	15	第17図	③区出土遺物	32
第6図	①区遺構(2)	16	第18図	④区遺構(1)	36
第7図	①区遺構(3)	17	第19図	④区遺構(2)	37
第8図	①区出土遺物	18	第20図	④区遺構(3)	38
第9図	②区遺構(1)	22	第21図	④区遺構(4)	39
第10図	②区遺構(2)	23	第22図	④区出土遺物	40
第11図	②区遺構(3)	24	第23図	八幡条里推定	43
第12図	②区遺構(4)	25	第24図	八幡条里坪配置推定	44

## 表目次

表1	周辺の遺跡一覧表	7	表4	③区遺物観察表	29
表2	①区遺物観察表	14	表5	④区遺物観察表	34
表3	②区遺物観察表	20			

## 写真図版目次

遺跡遠景(堰間・大工北)	写真図版 1	③区(大工北遺跡)	写真図版 6-8
①区(堰間遺跡)	写真図版 2-3	④区(大工北遺跡)	写真図版 8-9
②区(堰間遺跡)	写真図版 4-6		





## 第1章 経過

### 第1節 調査に至る経過

山梨県東建設事務所により主要地方道甲府山梨線バイパス工事について平成29年に協議があり、計画範囲内に大工北遺跡が存在していることから平成29年6月8日に埋蔵文化財包蔵地発掘の通知が山梨県東建設事務所より山梨市教育委員会に提出され、平成30年3月14日から27日および平成30年8月1日から15日にかけて山梨市教育委員会による試掘調査が行われた。

調査の結果、工事範囲内の一部において遺構・遺物が確認され、今回の発掘対象地である908㎡について遺跡の保護について山梨県東建設事務所と山梨市教育委員会が協議を行った結果、記録保存調査を行うこととなった。また、試掘調査の結果、新たに堰間遺跡が遺跡台帳に登録された。

業務の都合により調査範囲内すべてについて山梨市教育委員会が調査を行うことは困難であったことから、調査区のうち①区を山梨市教育委員会が担当し、②～④区は昭和測量株式会社が調査支援を行った（第1図）。

### 第2節 調査の目的と課題

今回の調査は八幡条里内を東西に横断する道路建設に伴い遺構・遺物の記録保存を行うことを目的とする。条里地割境界は成立時期から現代まで道路、水路、地境として継続しており、その位置が概ね重複していると考えられることから、現況の構造物の下から壊れずに残った遺構を検出することができるかが課題である。また、荘園の区画として成立したと考えられる範囲から条里成立時期の手掛かりとなる遺物を検出することができるかということも課題となった。

### 第3節 調査の経過

大工北遺跡・堰間遺跡の調査は山梨市教育委員会が主体となって実施し、生涯学習課の雨宮弘聡が発掘を担当した。②区～④区については山梨市から委託を受けて昭和測量株式会社が調査支援を行った。

#### ①区（堰間遺跡）

調査担当者 雨宮弘聡。発掘補助員 芦沢はつ子、広瀬侯子、直井光江、安田敏男、若月あい子、岡利恵、矢崎治道、藤原今朝男、田巻栄子、小澤志郎、鶴田清志。

#### ②区（堰間遺跡）・③区（大工北遺跡）・④区（大工北遺跡）

調査担当者 雨宮弘聡。支援調査員 高野高潔、浅川晃一。助言・指導 新津健。発掘補助員 内藤敏夫、中澤保、広瀬ありさ、藤巻浩太郎、松本榮一。基準点測量 相川喜美雄、中山楓。空中写真撮影 石原圭、堀内太一、吉田泰司、赤池直樹。

発掘調査は令和元年5月7日に開始し、令和元年8月2日に終了した。調査面積は908㎡である。調査は①区から開始し、④区、③区、②区の順に行った。各調査区の詳細は以下のとおりである。

#### ①区（堰間遺跡）調査期間、令和元年5月7日～6月12日。調査面積212㎡。

5月7日重機により調査区中央を残し表土除去、15日仮設ハウス等設置。8日人力掘削開始、10日遺構確認、13日遺構掘削。17日重機により調査区反転、埋め戻し及び中央部の掘削。20日人力掘削開始、23日遺構掘削。28日全体を掘り下げ、30日遺構確認。6月6日現場作業終了。12日仮設ハウス撤去。

④区（大工北遺跡）調査期間、令和元年5月9日～6月14日。調査面積238㎡。

5月9日現場打合せ、器材準備。10日除草作業。13～16日重機表土除去。14日仮設ハウス等設置。15日基準点測量、人力掘削開始。試掘トレンチを検出し、包含層を掘り下げながら、遺構検出を行った。6月5日ドローン空中写真撮影。6～14日重機埋め戻し。

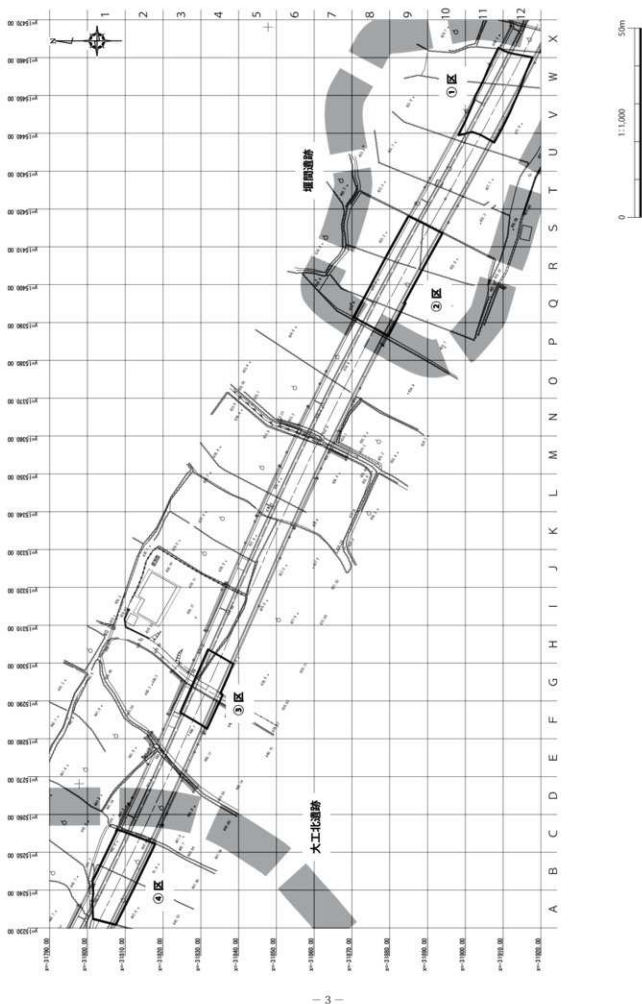
③区（大工北遺跡）調査期間、令和元年6月7日～7月5日。調査面積147㎡。

6月7日通行止め規制看板設置。除草作業。10日道路通行止め開始。農作業進入迂回路整備。13日道路舗装切断撤去。重機表土除去。14日人力掘削開始。現況が道路の範囲では舗装下の碎石を掘り下げ遺構を検出した。現況が畑の範囲では包含層を掘り下げ、遺構検出を行った。21日ドローン空中写真撮影。26日重機埋め戻し。28日復旧道路路盤工。29日舗装工。7月1日復旧農作業進入路すり付け。5日道路復旧、通行止め解除。

②区（堰間遺跡）調査期間、令和元年6月27日～8月2日。調査面積311㎡。

27～28日②区-1（西側半分）重機表土除去。28日人力掘削開始。試掘トレンチを検出し、包含層を掘り下げながら、遺構検出を行った。11日ドローン空中写真撮影。12日②区-1（西側半分）重機埋め戻し、②区-2（東側半分）重機表土除去。16日人力掘削開始。試掘トレンチを検出し、包含層を掘り下げながら、遺構検出を行った。29日ドローン空中写真撮影。8月1日②区-2（東側半分）重機埋め戻し。8月2日仮設ハウス等返却。器材撤収。現地調査終了。

整理作業は令和元年8月2日に開始し、令和2年2月26日に終了した。出土遺物の水洗、注記、接合、実測遺物の選定、実測、トレース、写真撮影、図版作成、調査報告書編集、版下データ作成を行った。原稿入稿後は校正を行い、報告書を刊行した。



第1図 調査区全体図

## 第2章 遺跡の立地と歴史的環境

### 第1節 地理的環境（第2図）

山梨県山梨市は甲府盆地の北東部から県境の関東山地までを占めている。大工北遺跡・堰間遺跡が所在する八幡地区は山梨市の南部にあり、甲府盆地北縁と山地の境目の谷底平野が広がる谷筋に位置している。大工北遺跡・堰間遺跡は山地の間に形成された谷底平野の谷頭部近くにあり、標高は約430m～440mである。比較的広い谷底平野は谷の南縁を兄川が、北縁を弟川が一段深く開析を進めたことで東西2km、南北0.6kmほどの細長い台地となっている。谷底平野谷頭部の台地上端は標高約450m、台地下端は標高約370m、笛吹川の右岸に接する谷口の氾濫平野は標高約360mである。

八幡地区では一町方格（約109m）の地割りが広がっており、古代から中世の圃場整備による土地区画と考えられ「八幡条里」と呼ばれている。明治期の八幡地区では平野部を利用して一面の水田が広がっていたが、現在はブドウやモモの果樹園が広がっている。

八幡地区の谷口である笛吹川沿いには、甲府から埼玉県秩父へ通じる幹線道路の国道140号が通っている。古くから秩父往還、秩父街道などと呼ばれる旧街道である。甲府市境の帯那山に源流をもつ兄川沿いに八幡地区を上っていくと、太良峠を越えて古府中郷獨ヶ崎の武田氏館跡に通じている。

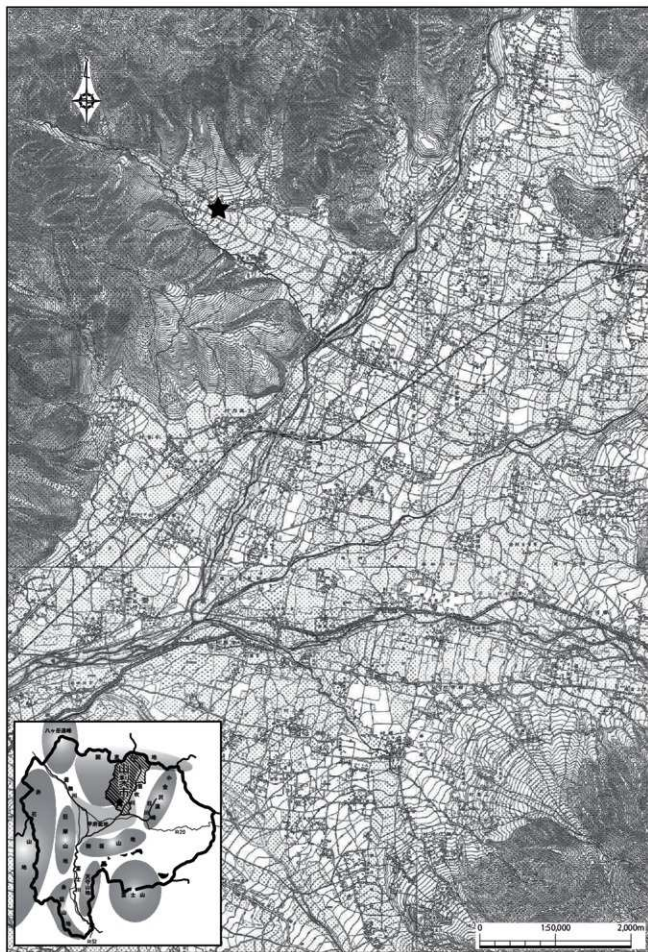
### 第2節 歴史的環境（第3図）

大工北遺跡（1）・堰間遺跡（2）が所在する八幡地区の主な遺跡を古い時代からみていくと、兄川河床遺跡（3）からはナウマンゾウの化石が出土している。大工南遺跡（6）では縄文土器が出土している。江曾原遺跡（4）、上コブケ遺跡（5）、膳棚遺跡（15）では平安時代の集落跡が発見され、荒神山窟跡（24）では平安時代末の上師器焼成遺構が確認されている。中世では15・16世紀に建立された建造物群が残る窪八幡神社（25）があり、近世では徳川御三卿の一家である清水家の所領支配を行った清水陣屋跡（32）がある。また、八幡地区の周辺では弥生時代の住居跡が発見されている堀ノ内遺跡（58）や古墳時代前期の住居跡や方形周溝墓が発見された小武家遺跡（78）、古墳時代前期の土師器が大量に廃棄された足原田遺跡（59）などが知られている。また山地には天神塚古墳（67）を含む岩下古墳群（66）、山根古墳群（70）などの古墳時代後期の古墳が分布し、低地にも稲荷塚古墳（71）などがある。八幡地区およびその周辺には古くから各時代の遺跡が分布し、各期を通して主要な地であったことが分かる。

八幡地区には一町方格の地割りが明瞭に見られ「八幡条里」と呼ばれている。「条里制」は8世紀半ば以降に実施された律令制に基づくものであるが、八幡条里は古代末期の安田氏による荘園の条里と考えられている。安田義定の勢力下で12世紀初頭に八幡荘の荘園経営のために、古代からの条里地割りを再編し成立したものと推定されている。条里範囲は八幡地区から笛吹川の対岸まで広がり、山梨市下神内川、下石森、上石森、鴨居寺、三ヶ所、上之割、小原東、小原西、下井尻、七日市場、隣接の塩山市三日市場、上井尻、藤木までと考えられ、同一軸の方形区画が確認されている。条里の基軸線は八幡地区東端の窪八幡神社と西端の天神社を結ぶ線とみられ、並行式坪並の条里とみられている。

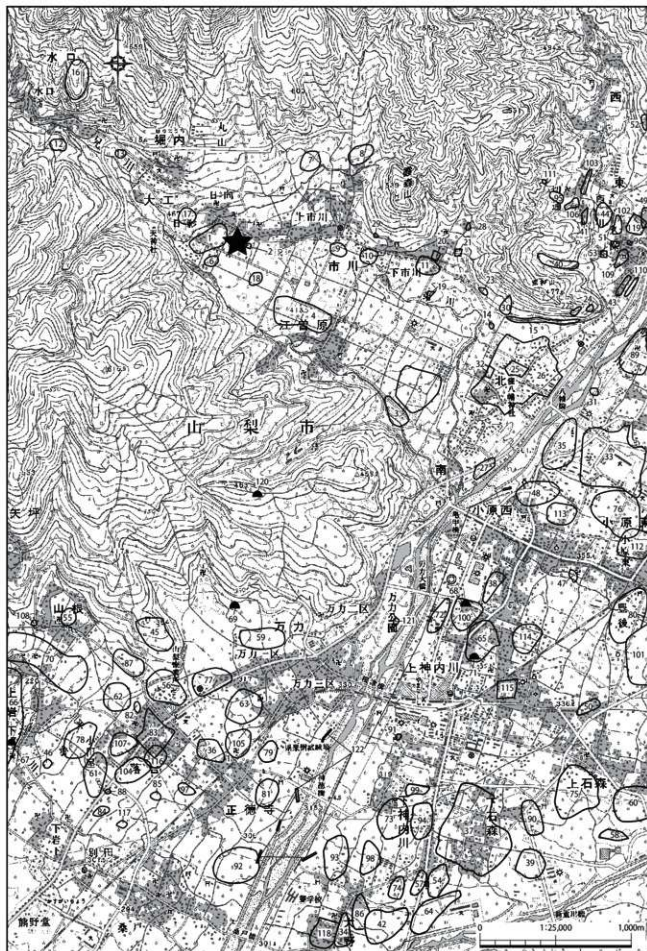
#### 参考文献

- 山梨県 1998 『山梨県史 資料編1 原始・古代1考古（遺跡）』
- 山梨県 2004 『山梨県史 通史編1 原始・古代』
- 山梨市 2004 『山梨市史 史料編 近世』
- 山梨市 2005 『山梨市史 資料編 考古・古代・中世』
- 山梨市 2005 『山梨市史 文化財・社寺編』
- 山梨市 2007 『山梨市史 通史編 上巻』



★調査地（大工北道跡・櫻間道跡）

第2図 調査地の位置



★調査地（大工北遺跡・壺間遺跡）

第3図 周辺の遺跡分布

表1 周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	種別	時代	所在地	No.	遺跡名	種別	時代	所在地
1	大工北遺跡	散布地	縄文/古墳/平安	大工字日影	62	千原田遺跡	集落跡	古墳/平安	落合字千原田
2	岡田遺跡	集落跡	縄文/平安/中世	蟹内字塚原	63	間之田遺跡	散布地	古墳/平安	正徳寺字間之田
3	見川河床遺跡	その他	旧石器	南字上見川(見川河床)	64	雲林遺跡	散布地	古墳/平安	下石森字雲林
4	江草原遺跡	集落跡	縄文/古墳/平安	山梨市江草原字江草	65	塚越遺跡	散布地	古墳/中世	上神内字塚越
5	上ツツケ遺跡	集落跡	縄文/平安	北字上ツツケ	66	岩下古墳群	古墳群	古墳	上野下
6	大工田遺跡	散布地	縄文	大工字井ノ久保原	67	天神塚古墳	古墳	古墳	上岩下字天神山
7	魚林遺跡	散布地	縄文	市川字魚林	68	平塚古墳	古墳	古墳	上神内川字平塚
8	市川北遺跡	散布地	縄文	市川字平山	69	長原寺南古墳	古墳群	古墳	上万字蟹沢
9	市川西遺跡	散布地	縄文	市川字鶴田	70	山根古墳群	古墳群	古墳	山根
10	鶴田遺跡	集落跡	縄文	市川字鶴田	71	稲荷塚古墳	古墳	古墳	上神内川字塚越
11	市川東遺跡	散布地	縄文	市川字神明原	72	日下部病院前遺跡	散布地	古墳	上神内川字水上
12	袖平遺跡	散布地	縄文	水口字袖平	73	杉ノ木遺跡	集落跡	古墳	下神内川字杉木
13	市山遺跡	散布地	縄文/中世	水口字市山	74	赤高西遺跡	散布地	古墳/平安	下石森字赤高
14	蟹引田遺跡	集落跡	古墳	北字蟹引田	75	上黒木遺跡	散布地	奈良/平安/中世	下石森字上黒木
15	藤原遺跡	集落跡	平安	北字中藤原ほか	76	太郎遺跡	散布地	奈良/平安	小原東字太郎
16	安平遺跡	散布地	平安	水口字安平	77	原ノ前遺跡	散布地	奈良	万字原ノ前
17	小浜遺跡	散布地	平安	蟹内字小浜	78	小武家遺跡	集落跡	平安/中世	上岩下字小武家
18	戸原遺跡	散布地	平安	大工字戸原	79	三宮寺遺跡	散布地	平安/中世	正徳寺字三宮寺
19	大塚遺跡	散布地	平安	市川字大塚	80	流間遺跡	散布地	平安/中世	三ノ所字流間
20	神明南遺跡	散布地	平安	市川字神明南	81	九ツ塚遺跡	散布地	平安/中世	正徳寺字九ツ塚
21	於北南遺跡	散布地	平安	市川字於北	82	三敷地遺跡	散布地	平安/中世	上岩下字三敷地
22	於下西遺跡	散布地	平安	東字中下	83	原敷遺跡	散布地	平安/中世	落合字原敷
23	稲詰藪遺跡	散布地	平安/中世	北字稲詰藪	84	荻原遺跡	散布地	平安/中世	落合字荻原
24	虎神山宗跡	宗跡	平安/中世	東字虎神山	85	正徳寺前田遺跡	散布地	平安	正徳寺字前田
25	徳八幡神社	神社	中世	北字神田	86	天神原北遺跡	散布地	平安	大野字天神原
26	徳八幡神社北東中群	社寺跡	中世/近世	北	87	地蔵久保遺跡	散布地	平安	落合字地蔵久保
27	徳八幡神社北東北群	社寺跡	平安/中世	南	88	落合市道遺跡	散布地	平安	落合字市道
28	於北北遺跡	その他	中世/近世	市川字於北	89	天神原南遺跡	散布地	平安	七丁目字天神原
29	神明南遺跡	社寺跡	中世/近世	市川字神明南	90	宮ノ前遺跡	散布地	平安	下石森字宮ノ前
30	西片山遺跡	その他の墓	中世/近世	北字西片山	91	宮ノ上遺跡	散布地	平安	下神内川字宮ノ上
31	権理塚経塚	経塚	中世/近世	七丁目権理塚	92	五林寺遺跡	散布地	平安	正徳寺字五林寺
32	清水原岡跡	岡跡	近世	北字ウツコシ	93	竜木田遺跡	散布地	平安	大野字竜木田
33	日下部遺跡	集落跡	縄文/古墳/平安/中世	小原東字日牟牟	94	宗高北遺跡	散布地	平安	下石森字宗高
34	高石遺跡	集落跡	縄文/古墳/平安	大野字高石	95	切通西遺跡	散布地	平安	東字切通
35	立石遺跡	集落跡	縄文/奈良/平安	小原東字立石	96	久保田遺跡	散布地	平安	東字久保
36	天神田遺跡	散布地	縄文/平安/中世	正徳寺字天神田	97	林間遺跡	散布地	平安	正徳寺字林間
37	尾敷原遺跡	散布地	縄文/平安/中世	下石森字尾敷原	98	市道遺跡	散布地	平安	大野字市道
38	橋本田遺跡	集落跡	縄文/古墳	小原西字橋本田	99	雨田遺跡	散布地	平安	上神内川字雨田
39	上石森塚越遺跡	散布地	縄文/平安	上石森字塚越	100	平塚遺跡	散布地	平安	上神内川字平塚
40	大久保遺跡	散布地	縄文/平安	東字大久保	101	吉野遺跡	散布地	平安	三ノ所字吉野
41	切通南遺跡	散布地	縄文/平安	東字切通	102	久保遺跡	散布地	平安	東字久保
42	天神田東遺跡	散布地	縄文/平安	大野字天神田	103	壺下遺跡	散布地	平安	西字壺下
43	中島遺跡	散布地	縄文/平安	東字中島	104	壺之内遺跡	散布地	平安	落合字壺之内
44	藤の木下遺跡	散布地	縄文/平安	東字藤の木下	105	間之田東遺跡	散布地	平安	正徳寺字間之田
45	金伝遺跡	散布地	縄文/平安	落合字金伝	106	切通東遺跡	散布地	平安	東字切通
46	小金田遺跡	散布地	縄文	上岩下字小金田	107	田原之南遺跡	散布地	平安	落合字田原之南
47	寺の下遺跡	散布地	縄文	小原西字寺の下	108	蓮田遺跡	その他の墓	中世/近世	山根字蓮田
48	八王子遺跡	集落跡	縄文	小原東字八王子	109	東田遺跡	社寺跡	中世/近世	東字東田
49	久保田遺跡	散布地	縄文	東字久保田	110	下河原遺跡	その他	中世/近世	東字下河原
50	上千原遺跡	散布地	縄文	上石森字上千原	111	切通北遺跡	その他	中世/近世	東字切通
51	村西遺跡	散布地	縄文	東字村西	112	安田義定塚跡	塚跡	中世	小原東字白山
52	栗川遺跡	散布地	縄文	東字栗川	113	安田義定塚跡	塚跡	中世	小原西字八王子
53	丸山遺跡	散布地	縄文	東字丸山	114	松原遺跡	散布地	中世	上神内川字松原
54	宗高東遺跡	散布地	縄文	下石森字宗高	115	城伊能塚跡	塚跡	中世	上神内川字伊能
55	長田遺跡	散布地	縄文	山根字長田	116	落合塚跡	塚跡	中世	落合字塚越
56	延命寺遺跡	集落跡	奈良/古墳/平安	落合字延命寺	117	欠之下遺跡	散布地	中世	正徳寺字欠之下
57	宗高南遺跡	散布地	奈良/古墳	下石森字宗高	118	大野島跡	塚跡	中世	大野字三ノ六
58	壺ノ内遺跡	集落跡	奈良/平安	上石森字壺ノ内	119	上野字尾敷	塚跡	近世	東字久保
59	足原田遺跡	集落跡	古墳/平安/中世	万字足原田	120	富士塚	古墳	近世	上万字藤原
60	金山林遺跡	集落跡	縄文/奈良/平安	上石森字金山林	121	藤行徳	塚跡	近世	万字正月林
61	半原池遺跡	散布地	古墳/平安	落合字半原池	122	富吹川遺跡群	遺跡	近世/近現代	その他(塚跡群)

## 第3章 調査の方法

### 第1節 調査の方法

GPS測量により4級基準点測量を行い基準点を設置した。測量成果は世界測地系とし、標高については直接水準測量にて算出した。遺構の計測、遺物の取り上げは基準点をもとにトータルステーションで行った。

調査区全体の北西隅を起点として10m方眼のグリッドを設定した。東西にアルファベット、南北に数字の名称を付した(第1図)。

各調査区の表土掘削・発生土の埋め戻しはバックホウ0.13㎡で行った。調査区はブドウ畑の中を東西に延びて設定された。このため南北に分断された畑への通路を確保する必要が生じた。①区と②区では、1度に全域を表土除去せずに2度に分けて行った。③区では現況の道路が調査区内に含まれた。このため、道路部分では道路を通行止めにして舗装を切断・撤去した。その後に表土除去を行った。③区では北側に車両の通路、南側に歩行者通路を設置した。④区では1度に全域を表土除去することができ、発生土を水路を跨いだ隣接地に仮置きした。

発生土の埋め戻しは次の表土除去を行う前にその都度行った。進入路を遮断する箇所を常に1か所だけにすることで迂回路を確保し、事業範囲全体でも農作業通路の確保を行った。また③区では路盤工・舗装工を行い道路部分の復旧も行った。表土掘削・埋め戻しの重機運転、道路土工は有限会社宮脇工業が行った。

表土の掘削後、人力で遺構の検出を行った。検出遺構は各調査区ごとに番号を付した。

遺物包含層及び遺構から出土した遺物は順に番号を付して、トータルステーションを使用して位置を記録し取り上げを行った。小破片については一括出土遺物として取り上げた。

遺構平面図およびエレベーション図は、トータルステーションを使用して計測し作図した。セクション図は手書きで作図した。全体図・微細図はボール撮影やドローンによる空中撮影の写真も使用し、写真計測も併用して作図した。遺構・遺物の記録写真は一眼レフカメラで、35mmモノクロネガフィルムとデジタルカメラを併用して撮影した。

整理作業は出土遺物の水洗、注記、接合、実測遺物の選定、実測、トレース、写真撮影、図版作成、調査報告書編集、版下データ作成を行った。遺物の実測は手描き及び三次元測定機を用いて行った。トレースから調査報告書の版下データ作成まではデザインソフト等を使用してデジタルデータで行った。遺物写真は一眼レフデジタルカメラで、35mmモノクロネガフィルムとデジタルカメラを併用して撮影した。

#### 使用システム

トータルステーション TOPCON SOKKIA SET5XS

電子平板 Panasonic TOUGHBOOK CF-19

遺構実測支援ソフト CUBIC社「遺構くん」電子平板対応

写真計測ソフト Agisoft社「PhotoScan Professional」

デザインソフト adobe社「illustratorCC」

写真ソフト adobe社「PhotoshopCC」

編集ソフト adobe社「InDesignCC」

三次元測定機 キーエンス社「3Dスキャナ型三次元測定機 VL-350」



## 第2節 基本層序

大工北遺跡・堰間遺跡の基本層序を調査区別に記載する(第4図)。大工北遺跡と堰間遺跡の調査範囲の標高は430.3m～442.6mを測る。西側の④区から東側の①区へ向かって下る傾斜地形である。各調査区では高低差があり堆積土層も異なったため、基本層序の番号は共通ではなく調査区毎に付した。

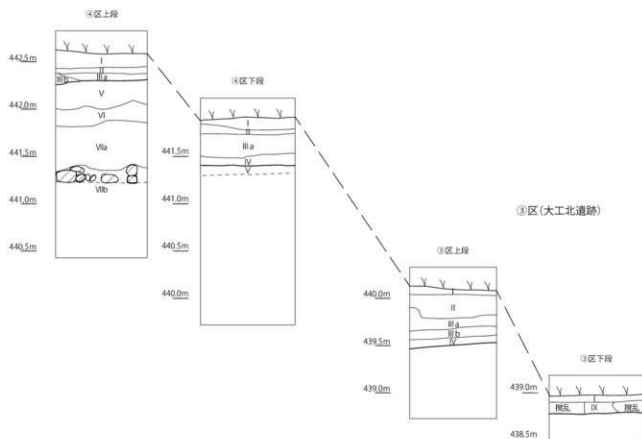
①区(堰間遺跡)ではⅥ層[水田]の下に明確な遺物包含層が検出されなかった。遺構確認はⅣ層及びⅦ層の上面で行った。Ⅰ層 表土[ブドウ畑]。Ⅱ層 にぶい黄褐色(10YR6/3) 締まりあり 粘性あり[水田]。Ⅲ層 灰黄褐色(10YR5/2) 締まりあり 粘性あり。Ⅳ層 明黄褐色(10YR6/8) 締まりあり 粘性あり[水田]。Ⅴ層 にぶい黄褐色(10YR6/4) 締まりあり 粘性あり。Ⅵ層 褐色(10YR4/4) 締まりあり 粘性あり。Ⅶ層 黄褐色(10YR5/8) 締まりあり 粘性あり[水田]。

②区(堰間遺跡)ではⅡ層[水田]の下に明確な遺物包含層が検出されなかった。遺構確認はⅣ層及びⅤ層の上面で行った。Ⅰ層 表土[ブドウ畑]。Ⅱa層 にぶい黄褐色(10YR4/3) 粘土質シルト 締まりあり 粘性強い 径2cmの礫を1%・粗砂3%含む[水田]。Ⅱb層 暗オリーブ色(5Y4/4) 粘土質シルト 締まりあり 粘性強い[水田]。Ⅱc層 褐色(7.5YR4/3) 粘土質シルト 締まりあり 粘性強い[水田]。Ⅲa層 黒褐色(5YR3/1) 粘土質シルト 締まりあり 粘性強い 径1cmの礫を1%・粗砂を3%含む 炭化物を1%含む 酸化鉄分が混じる。Ⅲb層 黒褐色(7.5YR2/2) 粘土質シルト 締まりあり 粘性強い 粗砂を10%含む 炭化物を1%含む 酸化鉄分が混じる。Ⅳ層 オリーブ褐色(2.5Y4/4) 粘土質シルト 径2cmの礫を1%・径10cmの礫を10%・粗砂を20%含む 炭化物を1%含む 砂を多く含む。Ⅴ層 オリーブ褐色(2.5Y4/6) シルト 径2cm大の礫を90%・粗砂を20%含む。

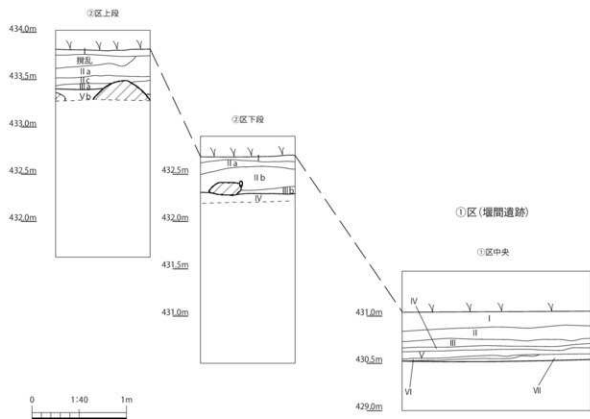
③区(大工北遺跡)では包含層であるⅣ層を人力で掘削し、その下のⅨ層上面で遺構確認を行った。③区東側の下段範囲ではⅠ層[表土]の下がⅨ層[地山]であった。傾斜地の造成時に削平されたと思われる。Ⅰ層 表土[ブドウ畑]。Ⅱ層 にぶい黄褐色(10YR6/4) 粘土質シルト 締まりあり 粘性強い 径3cmの礫1%・細砂10%含む[水田]。Ⅲa層 にぶい黄褐色(10YR4/3) 粘土質シルト 締まりあり 粘性強い 径1～3cmの礫を5%・細砂を15%含む 炭化物1%含む[水田]。Ⅲb層 にぶい黄褐色(10YR5/3) 粘土質シルト 締まりあり 粘性強い 径1～2cmの礫を1%・細砂を10%含む 炭化物1%含む。Ⅳ層 黒褐色(7.5YR3/2) 粘土質シルト 締まりあり 粘性強い 径4cmの礫を1%・径1～2cmの礫を5%・細砂を10%含む 炭化物1%含む[遺物包含層]。Ⅸ層 明褐色(7.5YR5/8) シルト 締まりあり 粘性強い[遺構確認面][地山]。

④区(大工北遺跡)西側の上段範囲ではⅣ層[遺物包含層]が検出されない範囲があった。傾斜地に水田を造成した時に部分的に削平されたと思われる。遺構確認は遺物包含層であるⅣ層上面とその直下のⅤ層上面で行った。Ⅰ層 表土[上段:ブドウ畑、下段:モモ畑]。Ⅱ層 にぶい黄褐色(10YR4/3) 粘土質シルト 締まりあり 粘性強い 粗砂5%含む[水田]。Ⅲa層 にぶい黄褐色(10YR4/3) 粘土質シルト 締まりあり 粘性強い 径2cmの礫を2%・粗砂10%含む 炭化物1%含む 酸化鉄分含む[水田]。Ⅲb層 褐色(7.5YR4/1) 粘土質シルト 締まりあり 粘性弱い 径1cmの礫を1%・粗砂を1%含む。Ⅳ層 黒褐色(7.5YR3/2) 粘土質シルト 締まりあり 粘性強い 径4cmの礫を1%・径1～2cmの礫を5%・粗砂を20%含む[遺物包含層][遺構確認面]。Ⅴ層 暗褐色(7.5YR3/4) 粘土質シルト 締まりあり 粘性強い 径1～2cmの礫を20%・粗砂を40%含む[遺構確認面]。Ⅵ層 暗褐色(7.5YR3/3) 粘土質シルト 締まりあり 粘性弱い 径1～2cmの礫を5%・粗砂を20%含む 砂を多く含む。Ⅶa層 暗赤褐色(5YR3/6) 粘土質シルト 締まりあり 粘性強い 径1～2cmの礫を20%・粗砂を50%含む 砂を多く含む。Ⅶb層 礫層 径5～20cm。

④区(大工北遺跡)



②区(塚間遺跡)



第4図 基本層序

## 第4章 調査の成果

### 第1節 調査の概要(第1図、図版1)

発掘調査は山梨県東建設事務所による主要地方道甲府山梨線バイパス工事に伴い行われた。調査区は東西に延びる道路事業範囲内で4か所に分かれている。調査区名は東から西へ①区～④区とした。事業範囲は二つの遺跡範囲にまたがるため、東側の①区と②区は堰間遺跡、西側の④区は大工北遺跡である。

大工北遺跡は散布地として周知されている。遺跡の主な時代は縄文時代、古墳時代、平安時代である。堰間遺跡は集落跡として周知されている。主な時代は縄文時代、平安時代、中世である。

大工北遺跡・堰間遺跡は山地が開析された谷底平野の谷頭部近くにあり、標高は約430m～440mである。谷底平野は谷の南縁を兄川が、北縁を弟川が一段深く開析を進めたことで東西2km、南北0.6kmほどの細長い台地となっている。谷底平野谷頭部の台地上端は標高約450m、台地下端は標高約370mである。

発掘調査区①区～④区の標高は430.3m～442.6mを測る。東側の①区から西側の④区へ向かって上る傾斜地形である。①区～④区の水平距離は約255m、標高差は約12.3m、斜面の平均勾配は2.5°である。

大工北遺跡・堰間遺跡のある山梨市南部の八幡地区では一町方格(約109m)の地割が広がり、「八幡条里」という古代から中世の圃場整備による土地区画と考えられている。事業範囲である主要地方道甲府山梨線バイパスの路線は八幡条里内を東西に横断しており条里関連の遺構・遺物の検出が期待された。ただし、条里地割境界は成立時期から現代まで道路、水路、地境として継続しており、その位置が概ね重複していると考えられること、地割内は農作物の耕地として使用されたと考えられることから、条里成立時期と直接関わる遺構・遺物を検出することができるかは課題であった。発掘調査区①区・②区・④区は条里の地割内、③区は地割境界をまたいでいる。

今回の発掘調査では主に縄文時代、平安時代、中世、近世、近代の遺構・遺物が出土した。検出された遺構は①区:溝5条(SD1～5)、ピット6基(Pit1～6)、②区:溝1条(SD1)、土坑1基(SK1)、③区:道路1条(SF1)、④区:溝3条(SD1～3)、土坑1基(SK1)、ピット6基(Pit1～6)である。検出された遺物は①区:縄文土器・石器、平安時代灰釉陶器・土師器、中世陶器・かわらけ・土器、②区:縄文土器・石器、古墳時代・平安時代の須恵器・土師器、灰釉陶器、中世～近代の土器・陶磁器、古銭、ガラス製品、③区:縄文土器、近世・近代の磁器・金属製品・ガラス製品、④区:縄文土器である。

①区では水田が3層検出されており、遺物包含層から出土した平安時代の灰釉陶器や土師器、中世陶器や土師器のかわらけとの関連が注目された。

②区では遺物包含層から小片ではあるが多くの縄文土器が出土し、打製石斧、石鏃なども出土している。少量ではあるが土師器、須恵器、灰釉陶器、青磁、土師質土器などが出土しており、近隣に集落の存在を感じることができる。

③区では現在の道路の下から旧道を検出した。道幅半間の道路を谷側に石を積み、盛り土することで、道幅1間の道路に拡幅している様子が明らかとなった。道幅半間の旧道には山側に溝状の浅い窪みがあり、側溝と考えられる。この道路は条里の地割境界と重複することから、道路遺構からは近世以前の遺物は出土していないが、条里成立時期の地割境界としての道のあり方を思い描くことができた。

④区では溝と包含層から縄文時代前期後半、中期中葉、中期後半、後期初頭の縄文土器が出土した。平安時代や中世の遺物は出土していないというのは③区と④区に共通する傾向で、①区・②区との差異である。このことは条里関連の集落との距離の違いを示唆するものと考えられる。

以下に調査区ごとに遺構と遺物を詳述する。

## 第2節 ①区

①区はU 10～X 12グリッドに位置する。調査区全体の中では東端に位置し、斜面の一番下の調査区である。現況はブドウが栽培される二段の畑地である。

①区は調査区を3分割し、まず北東側と南西側を掘削、調査終了後に埋め戻し中央部分を掘削、調査を行った。①区では試掘調査の際水田が3層検出されており(第6図A-A'セクションIV、VI、IX)、うち2層は近世以前のものである可能性があったため、水田が検出された範囲については2層目と3層目(同VI、IX)上面において遺構確認を行った。

### 【溝】

#### SD 1 (第5・6図、図版2・3)

水田2層目上面で検出された。主軸はN-5°E。幅は30cm～50cm、深さ20cmで、両端はそれぞれ調査区外に延びる。遺物は出土していない。SD 1を境に南東に近世以前の水田層がみられる。

#### SD 2 (第5・6図、図版2・3)

水田2層目を除去したところ検出された。主軸はN-76°W。幅は20cm～40cm、深さは10～18cmであり、北西に向かうに従い浅くなる。遺物は出土していない。北西側はSD 1を境として消失し、南東側は既存の石垣により消失している。

#### SD 3 (第5・8図、図版2・3、表2)

水田2層目を除去したところ検出された。主軸はN-84°W。幅は20cm、深さ10cmで、南東側は調査区外に向かって延びる。北東側はSD 1東側で消失する。出土地点を記録した遺物は2点で、全点図示した。1～2は縄文土器である。いずれも小破片のため詳細な時期検討が困難である。

#### SD 4 (第5・6・8図、図版2・3、表2)

①区内の畑地の境である既存の石垣を除去したところ検出された。水田2層目、3層目はSD 4を境に消失している。主軸はN-3°W。幅は調査区北側で100cm、深さ40cm。調査区北壁では溝の形状を確認できるが、北壁から115cmでSD 2および既存石垣と交差し消失している。溝の脇には直径40cm～130cm程度の石が並べられている。出土地点を記録した遺物は1点で、図示した。3は縄文土器である。小破片の為詳細な時期検討が困難である。

#### SD 5 (第5・7図、図版2・3)

主軸はN-68°E。幅は44cm～57cm、深さ30cm。遺物は出土していない。北西側は掘削により消失しているが、北西調査区外に延びていると思われる。

### 【ピット】

#### P i t 1 (第5・7図、図版2)

長さ46cm、幅47cm、深さ13cm。性格不明。遺物は出土していない。

#### P i t 2 (第5・7図、図版2)

長さ34cm、幅26cm、深さ10cm。性格不明。遺物は出土していない。

**P i t 3** (第5・7図、図版2)

長さ34cm、幅35cm、深さ8cm。性格不明。遺物は出土していない。

**P i t 4** (第5・7図、図版2)

長さ24cm、幅26cm、深さ5cm。性格不明。遺物は出土していない。

**P i t 5** (第5・7図、図版2)

長さ41cm、幅38cm、深さ19cm。性格不明。遺物は出土していない。

**P i t 6** (第5・7図、図版2)

長さ52cm、幅51cm、深さ17cm。性格不明。遺物は出土していない。

**遺構外出土遺物** (第5・6・8図、図版3、表2)

遺構外出土遺物は遺構確認面としたVI層から多く出土している。遺物は縄文土器・石器、平安時代の灰軸陶器、土師器、中世の陶器、かわらけ、土器が出土している。出土地点を記録した遺物は31点で、一括取り上げ遺物も含めて21点図示した。

4～9は縄文土器である。4は口縁部である。口唇部内側が肥厚している。5は深鉢の底部である。底面との貼り付け部で剥がれている。平底で最下部が張り出す形状と思われる。中期初頭、五領ヶ台式と考えられる。

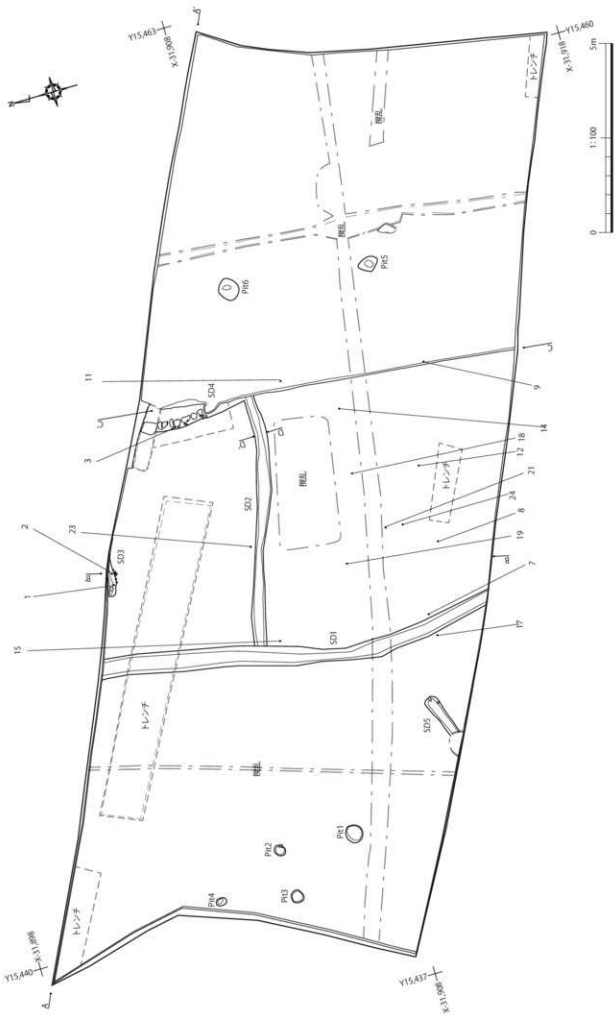
10～13は縄文時代の黒曜石の石器である。10～12は石核である。10は剥離面を打面としている。正面右側は剥片剥離時に破損している。剥離末端も裏面まで抜けていることから、石核が大きく減じ放棄されたと考えられる。11の打面は折れ面を利用していると考えられる。裏面は風化が進んでいる。12は打面から裏面にかけて礫面が残存している。打面には複数の打撃痕がみえる。正面右側は剥片剥離時に破損している。13は横長剥片である。調整剥離は見られない。14水晶である。結晶面を一面残す碎片である。15は円礫である。

16は平安時代の灰軸陶器である。瓶類の胴部と思われる。17・18は土師器である。坏の口縁部と底部である。19は中世陶器である。常滑の甕と思われる。20はかわらけの底部である。21・22は土器である。鍋・甕類の胴部と思われる。23・24は瓦質土器である。23は擂鉢で内面の卸目は8条以上と観察される。24は鉢と思われる。

表2 ①区遺物観察表

※数値単位はcm、(数値)は復元・残存値

遺構名	遺物番号	写真図版番号	種別	器種	部位	口径/長	底径/幅	器高/厚	色調	焼成	胎土	備考
SD3	1	3	縄文土器	—	—	—	—	—	赤褐色5YR4/6	良好	長石・石英・白色粒	
SD3	2	3	縄文土器	—	—	—	—	—	褐色5YR6/8	良好	長石・石英・白色粒	
SD4	3	3	縄文土器	—	—	—	—	—	明赤褐色5YR5/6	良好	長石・石英・白色粒	
遺構外	4	3	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	—	赤褐色5YR4/6	良好	長石・石英・白色粒	
遺構外	5	3	縄文土器	深鉢	底部	—	—	—	赤褐色5YR4/6	良好	長石・石英・白色粒・赤色粒	中期初頭、玉頸・台
遺構外	6	3	縄文土器	—	—	—	—	—	褐色5YR6/8	良好	長石・石英・白色粒	
遺構外	7	3	縄文土器	—	—	—	—	—	赤褐色5YR4/8	良好	長石・石英・白色粒・赤色粒	
遺構外	8	3	縄文土器	—	—	—	—	—	明赤褐色5YR5/8	良好	長石・石英・白色粒	
遺構外	9	3	縄文土器	—	—	—	—	—	褐色7.5YR4/4	良好	長石・石英・白色粒	
遺構外	10	3	石器	石核	—	1.7	1.2	1.2	※計測値は軸長・軸幅・軸厚	—	石材:黒曜石	重量2.4g
遺構外	11	3	石器	石核	—	1.4	1.9	0.9	※計測値は軸長・軸幅・軸厚	—	石材:黒曜石	重量2.4g
遺構外	12	3	石器	石核	—	2.4	1.9	1.0	※計測値は軸長・軸幅・軸厚	—	石材:黒曜石	重量4.8g
遺構外	13	3	石器	剥片	—	1.1	2.7	1.0	※計測値は軸長・軸幅・軸厚	—	石材:黒曜石	重量1.9g
遺構外	14	3	水晶	碎片	—	1.7	0.6	1.0	—	—	—	重量1.2g
遺構外	15	3	円筒	—	—	2.2	1.7	0.5	—	—	石材:凝灰岩	重量3.3g
遺構外	16	3	灰釉陶器	瓶類	胴部	—	—	—	—	—	—	
遺構外	17	3	土師器	坪	口縁部	—	—	—	にぶい・褐色7.5YR7/4	良好	長石・石英・白色粒・赤色粒	
遺構外	18	3	土師器	坪	底部	—	—	—	褐色5YR6/6	良好	長石・石英・白色粒・赤色粒	
遺構外	19	3	陶器	甕	—	—	—	—	輪調:明褐色7.5YR7/2 にぶい・褐色7.5YR6/3	—	胎土:褐色7.5YR6/1	常滑
遺構外	20	3	土師質土器	かわかけ	底部	—	(5.6)	(2.1)	褐色7.5YR6/8	良好	長石・石英・白色粒・赤色粒	
遺構外	21	3	土器	甕類	胴部	—	—	—	褐色7.5YR6/8	良好	長石・石英・白色粒	
遺構外	22	3	土器	甕類	胴部	—	—	—	明赤褐色5YR5/6	良好	細砂粒・長石・石英・黒色粒	
遺構外	23	3	瓦質土器	深鉢	胴部	—	—	—	灰色7.5Y5/1	良好	細砂粒・長石・石英	目目8条以上
遺構外	24	3	瓦質土器	鉢	—	—	—	—	灰白色N7/	良好	細砂粒・長石・石英	

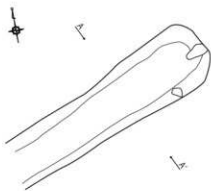


第5図 ①区遺構(1)





SD5

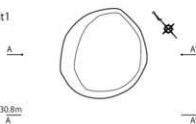


430.8m

SD5

- 1 暗褐色(10YR3/4) 締まりあり 粘性あり
- 2 褐色(10YR4/6) 締まり少々 粘性なし 粒子大にふい黄褐色(10YR6/4)砂が混じる

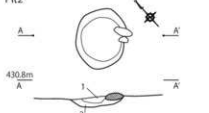
Pit1



Pit1

- 1 褐色(10YR4/6) 締まりなし 粘性少々 粒子大
- 2 明褐色(7.5YR5/6) 締まりなし 粘性少々 粒子大にふい褐色(10YR6/4)砂が混じる

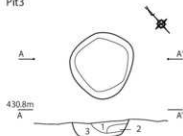
Pit2



Pit2

- 1 褐色(10YR4/6) 締まりなし 粘性なし 粒子大
- 2 黄褐色(10YR5/6)に 濃い黄褐色(10YR6/4)砂が混じる

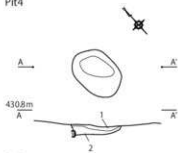
Pit3



Pit3

- 1 褐色(10YR4/6) 締まりなし 粘性なし 粒子大にふい黄褐色(10YR6/4)砂が混じる
- 2 にふい黄褐色(10YR5/4) 締まりなし 粘性なし 粒子大にふい黄褐色(10YR6/4)砂が混じる
- 3 黄褐色(10YR5/6) 締まりあり 粘性あり 粒子大

Pit4



Pit4

- 1 暗褐色(10YR3/4) 締まり少々 粘性なし 粒子大
- 2 褐色(10YR4/6) 締まりなし 粘性なし 粒子大にふい黄褐色(10YR6/4)砂が混じる

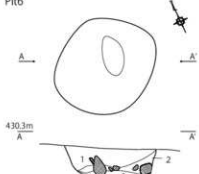
Pit5



Pit5

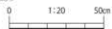
- 1 暗褐色(10YR3/4) 締まりあり 粘性あり

Pit6

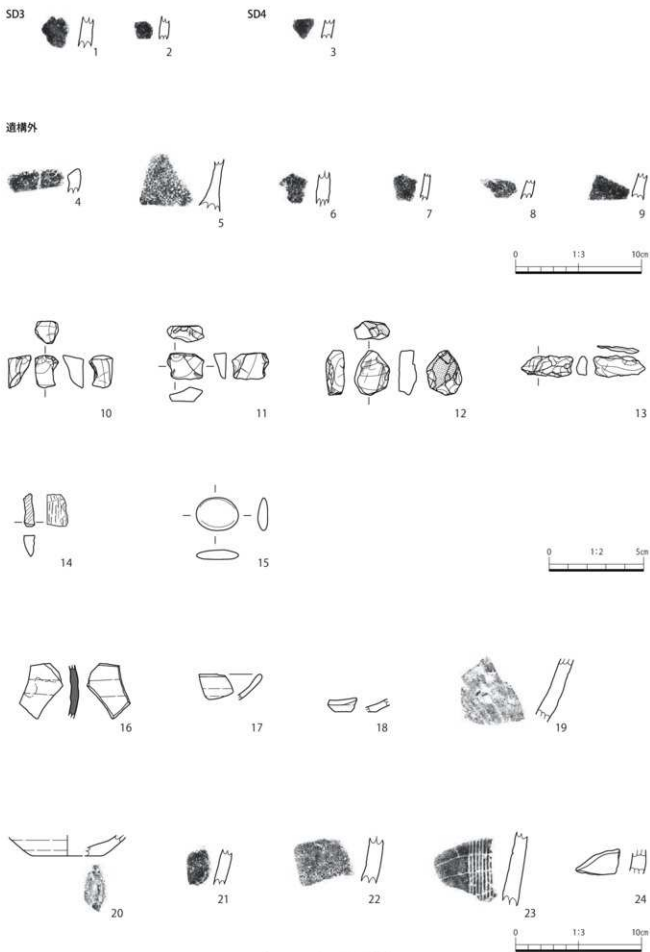


Pit6

- 1 暗褐色(10YR3/4) 締まりあり 粘性あり
- 2 黑褐色(10YR2/2) 締まりあり 粘性あり
- 3 褐色(10YR4/6) 締まりあり 粘性あり



第7図 ①区遺構(3)



第8図 ①区出土遺物

### 第3節 ②区

②区はP8～S10グリッドに位置する。調査区全体の中では①区の西で③区の東に位置し、下から二番目の調査区である。現況はブドウが栽培される畑地で、上中下の三段に分かれる。下段は更に北と南で高さが異なり二段に分かれる。現地表面は上段が標高433.8m、中段が433.2m～433.4m、下段の北側が433.2m、南側が432.6m～432.8mである。果樹栽培以前は水田であり、厚さ20cmの床土を入れて水田面を作っている。水田床土の下では明確な遺物包含層は検出されず、地山面、旧流路が検出された。旧流路は幅7～10mで東西方向に延びている。トレンチの土層断面で泥、砂、礫の互層が深さ60cmまで観察された。地山面、旧流路上面でも遺構を確認した。遺構確認面は上段が標高433.4m、中段が432.9m～433.1m、下段の北側が432.9m、南側が432.3m～432.5mである。現地表面と遺構検出面は概ね30cm差でほぼ並行である。

遺構は溝1条(SD1)、土坑1基(SK1)を検出した。遺物は遺構および旧流路堆積土層、水田床土、ブドウ棚の攪乱中から出土している。主に縄文土器・石器、古墳時代・平安時代の須恵器・土師器、中世～近代の土器、陶磁器が出土している。

#### 【溝】

SD1 (第9・11～13図、図版4・5、表3)

調査区西側に位置し、南北方向に延びる。検出範囲で長さ6.8m、幅0.6m～1.3m、深さ23～38cm。北側は調査区外へ延びている。南側は重複する現況の石積みと水田に削平されて調査区内で消滅する。直線的な溝で方向はN-20°Eである。底面の傾斜は北から南へ下っている。石積みの方向はN-30°Eである。

出土地点を記録した遺物は2点で、全点図示した。1はかわらけである。底部に回転さ切り痕がみられる。中世と考えられる。2は磁器の仏飯器胴部である。肥前。近世と考えられる。

#### 【土坑】

SK1 (第9・11～13図、図版4・5、表3)

調査区北側に位置する。検出範囲で長さ58cm、幅86cm、深さ3～10cm。平面は楕円形、断面は平らな底面から急に壁が立ち上がる。北側は調査区外へ延びる。上部は水田に削平されている。

出土地点を記録した遺物は6点で、全点図示した。3～8は縄文土器である。いずれも小破片のため詳細な時期検討が困難である。

#### 遺構外出土遺物 (第12～14図、図版5・6、表3)

遺構外出土遺物は遺構確認面上の黒褐色の遺物包含層から出土している。遺物は縄文土器・石器、古墳時代土師器、平安時代須恵器、灰釉陶器、土師器、中世かわらけ、近世磁器、陶器、古銭、近代磁器、ガラス製品が出土している。出土地点を記録した遺物は85点で、一括取り上げ遺物も含めて75点図示した。

9～53は縄文土器である。9は前期初頭の繊維土器である。10は口縁部に爪形文がみえる。前期後半、諸磯b式と考えられる。11は胴部下部に縄文がみえる。中期初頭、五領ヶ台式と考えられる。12は波状の口縁部である。隆帯上に綾杉状の刺突文がみえる。13は隆帯の脇に爪形文がみえる。12・13は中期中葉、藤内・井戸尻式と考えられる。14は口唇部に2条の横位刺突文がみられる。その下に地文として単節縄文RLがみられる。15は口唇部に横位の沈線がみえる。中期後半、曾利式と考えられる。16は沈線がみえる。重弧文と思われる。17は縄文が見える。18は縦位の沈線がみえる。19・20は斜位の沈線がみえる。17～20は中期と考えられる。21・22は太い沈線がみえる。後期初頭と考えられる。

54～56は縄文時代の石器である。54は打製石斧である。刃部には使用による破損と思われる剥離がある。基部は折損している。短冊形。55は石錐と思われる。刃部断面は幅広くやや扁平である。基部に張り出し

表3 ②区遺物観察表

※数値単位はcm、(数値)は復元・残存値

遺構名	遺物番号	写真図版番号	種別	器種	部位	口径/底径/長さ	器高/器厚	色調	焼成	胎土	備考
SD1	1	5	土師質土器	かむすけ	底部	—	—	褐色7.5YR7/6	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭	底部回転車切印
SD1	2	5	磁器	仏飯器	胴部	—	—	—	—	—	肥前
SK1	3	5	縄文土器	—	—	—	—	褐色7.5YR5/6	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭・金色雲母	—
SK1	4	5	縄文土器	—	—	—	—	明赤褐色5YR5/6	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭	—
SK1	5	5	縄文土器	—	—	—	—	明赤褐色5YR5/6	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭	—
SK1	6	5	縄文土器	—	—	—	—	褐色5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭	—
SK1	7	5	縄文土器	—	—	—	—	褐色5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭	—
SK1	8	5	縄文土器	—	—	—	—	明赤褐色5YR5/6	良好	細砂粒・石英・白色炭	—
遺構外	9	5	縄文土器	—	—	—	—	褐色5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭・金色雲母	縄文土器、前期初頭
遺構外	10	5	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	明赤褐色5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭・金色雲母	爪形文、前期後半、諸磯
遺構外	11	5	縄文土器	深鉢	胴～底部	—	—	赤褐色5YR4/6	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭・金色雲母	中期初頭、五領+台中
遺構外	12	5	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	褐色7.5YR6/6	良好	長石・石英・金色雲母	陸奥上朝英文、中期中葉、藤内・井戸原
遺構外	13	5	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	明赤褐色5YR5/6	良好	長石・石英・白色炭・黒色炭	陸奥脇に爪形文、中期中葉、藤内・井戸原
遺構外	14	5	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	明赤褐色2.5YR5/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭	朝英文、早期縄文層、中期中葉
遺構外	15	5	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	褐色5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭・金色雲母	横位沈線、中期後半、資料
遺構外	16	5	縄文土器	—	—	—	—	褐色5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭	沈線、重弧文、中期
遺構外	17	5	縄文土器	—	—	—	—	明赤褐色5YR5/6	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭・黒色炭	縄文
遺構外	18	5	縄文土器	—	—	—	—	明赤褐色5YR5/6	良好	細砂粒・石英・白色炭	縦位沈線
遺構外	19	5	縄文土器	—	—	—	—	明赤褐色5YR5/6	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭	斜位沈線
遺構外	20	5	縄文土器	—	—	—	—	褐色7.5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭	斜位沈線
遺構外	21	5	縄文土器	—	—	—	—	にじみ・褐色7.5YR5/4	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭	太い沈線、後期初頭
遺構外	22	5	縄文土器	—	—	—	—	褐色7.5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭	太い沈線、後期初頭
遺構外	23	5	縄文土器	—	口縁部	—	—	明赤褐色5YR5/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭	—
遺構外	24	5	縄文土器	—	—	—	—	褐色5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭・赤色炭	—
遺構外	25	5	縄文土器	—	—	—	—	明赤褐色5YR5/6	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭	—
遺構外	26	5	縄文土器	—	—	—	—	明赤褐色5YR5/6	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭・金色雲母	—
遺構外	27	5	縄文土器	—	—	—	—	明赤褐色5YR5/6	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭・金色雲母	—
遺構外	28	5	縄文土器	—	—	—	—	明赤褐色5YR5/6	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭・金色雲母	—
遺構外	29	5	縄文土器	—	—	—	—	褐色5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭	—
遺構外	30	5	縄文土器	—	—	—	—	褐色5YR6/8	良好	細砂粒・石英・白色炭	—
遺構外	31	5	縄文土器	—	—	—	—	明赤褐色5YR5/6	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭	—
遺構外	32	5	縄文土器	—	—	—	—	褐色5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・赤色炭	—
遺構外	33	5	縄文土器	—	—	—	—	明赤褐色5YR5/6	良好	細砂粒・長石・石英	—
遺構外	34	5	縄文土器	—	—	—	—	明赤褐色5YR5/6	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭・黒色炭	—
遺構外	35	5	縄文土器	—	—	—	—	褐色7.5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭	—
遺構外	36	5	縄文土器	—	—	—	—	にじみ・褐色7.5YR5/4	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭	—
遺構外	37	5	縄文土器	—	—	—	—	褐色7.5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭	—
遺構外	38	5	縄文土器	—	—	—	—	明赤褐色5YR5/6	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭	—
遺構外	39	5	縄文土器	—	—	—	—	明赤褐色5YR5/6	良好	長石・石英・黒色炭	—
遺構外	40	5	縄文土器	—	—	—	—	褐色5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭	—
遺構外	41	5	縄文土器	—	—	—	—	明赤褐色5YR5/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色炭	—
遺構外	42	5	縄文土器	—	—	—	—	褐色5YR6/6	良好	細砂粒・長石・石英・黒色炭	—

※数値単位はcm、(数値)は復元・残存値

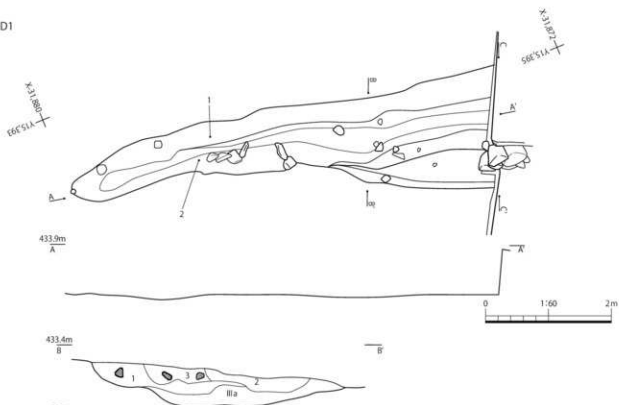
遺構名	遺物番号	写真図版番号	種別	器種	部位	口径/長	底径/幅	器高/厚	色調	焼成	胎土	備考
遺構外	43	5	縄文土器	—	—	—	—	—	褐色7.5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	
遺構外	44	5	縄文土器	—	—	—	—	—	明赤褐色5YR5/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	
遺構外	45	5	縄文土器	—	—	—	—	—	褐色5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	
遺構外	46	5	縄文土器	—	—	—	—	—	明赤褐色5YR5/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	
遺構外	47	5	縄文土器	—	—	—	—	—	褐色5YR6/6	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	
遺構外	48	5	縄文土器	—	—	—	—	—	褐色7.5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒・黒色粒	
遺構外	49	5	縄文土器	—	—	—	—	—	にぶい黄褐色10YR7/4	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒・黒色粒	
遺構外	50	5	縄文土器	—	—	—	—	—	褐色5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒・黒色粒	
遺構外	51	5	縄文土器	—	—	—	—	—	褐色5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒・黒色粒	
遺構外	52	5	縄文土器	—	—	—	—	—	褐色5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒・黒色粒	
遺構外	53	5	縄文土器	—	—	—	—	—	褐色5YR6/6	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	
遺構外	54	5	石器	打製石斧	—	(8.0)	4.9	1.3	※計測値は軸長・軸幅・軸厚	—	石材:緑泥片岩	短冊形、重量75.0g
遺構外	55	5	石器	石鏃	—	88.4	17.6	1.1	※計測値は軸長・軸幅・軸厚	—	石材:ホルンフェルス	重量20.6g
遺構外	56	5	石器	石鏃	—	(1.6)	(1.1)	(0.3)	※計測値は軸長・軸幅・軸厚	—	石材:黒曜石	短冊無茎、右脚部折損、重量0.4g
遺構外	57	6	土師器	丸底甕	底部	—	—	—	浅黄褐色7.5YR6/6	良好	長石・石英・赤色粒・金色雲母・黒色粒	古墳中期
遺構外	58	6	瓦器	壺	胴部	—	—	—	—	—	—	外面ハケ目、内面自然釉付着、古墳中期
遺構外	59	6	灰輪陶器	埴	胴部	—	—	—	—	—	—	外面回転ヘラケズリ
遺構外	60	6	土師器	埴	口縁部	—	—	—	褐色7.5YR6/6	良好	赤色粒・灰状白色粘土	9C
遺構外	61	6	土師器	埴	口縁部	—	—	—	褐色7.5YR6/6	良好	細砂粒・白色粒・赤色粒	9C
遺構外	62	6	土師器	埴	口縁部	—	—	—	明褐色7.5YR5/6	良好	赤色粒・白色粒・灰状白色粘土	玉縁口縁、10C
遺構外	63	6	土師器	埴	口縁部	—	—	—	明褐色7.5YR5/6	良好	長石・石英・赤色粒・灰状白色粘土	玉縁口縁、10C
遺構外	64	6	土師器	埴	胴・底部	—	(5.0)	(1.8)	褐色7.5YR6/6	良好	赤色粒	外面ヘラケズリ、10C
遺構外	65	6	土師器	皿	口縁部	—	—	—	褐色7.5YR7/6	良好	長石・石英・赤色粒・金色雲母	11C
遺構外	66	6	青磁	碗	胴部	—	—	—	—	—	—	外面蓮弁文、中世
遺構外	67	6	土器	内耳罎	口縁部	—	—	—	灰褐色7.5YR4/2	良好	細砂粒・長石・石英・赤色粒	内面把手刺刺痕、中世
遺構外	68	6	土器	罎	—	—	—	—	褐色7.5YR6/6	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒・黒色粒	中世
遺構外	69	6	土器	甕	—	—	—	—	明黄褐色10YR6/6	良好	長石・石英・黒色粒	中世
遺構外	70	6	土師質土器	—	—	—	—	—	明赤褐色5YR5/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	中世
遺構外	71	6	土器	鉢	底部	—	(5.0)	(3.7)	褐色7.5YR6/6	良好	長石・石英・赤色粒	中世
遺構外	72	6	土器	鉢	—	—	—	—	外面:明褐色5YR4/1	良好	細砂粒・長石・石英・黒色粒・金色雲母	中世
遺構外	73	6	磁器	香炉	口縁部	(8.0)	—	(1.5)	—	—	—	青磁釉、近世
遺構外	74	6	陶器	皿	底部	—	(8.0)	(1.2)	釉調:灰白色7.5Y7/1	—	胎土:灰白色2.5Y8/1	志野、17C
遺構外	75	6	陶器	碗	底部	—	(4.6)	(1.9)	釉調:黄褐色10YR2/2 灰白:灰白色5Y7/2	—	胎土:灰白色2.5Y8/2	外面・高台内敷釉、墨付き無釉、内面灰釉
遺構外	76	6	陶器	鉢	底部	—	5.2	(1.7)	釉調:黄褐色2.5Y5/3	—	胎土:灰黄色2.5Y7/2	外面・内面灰釉、高台無釉、削り出し・高台
遺構外	77	6	陶器	皿	底部	—	(9.0)	(2.2)	釉調:浅黄色2.5Y7/3	—	胎土:灰白色2.5Y8/2	京焼風、高台無釉
遺構外	78	6	土器	皿	口縁部	—	—	—	にぶい褐色7.5YR7/4	良好	長石・石英・赤色粒・金色雲母	近世
遺構外	79	6	銭貨	文久永宝	—	2.6	0.6	0.1	※計測値は外径・穴幅・厚	—	鋼鉄、重量3.25g	初周年1863文久3、背上一度、四文銭
遺構外	80	6	磁器	碗	—	—	(4.5)	(3.8)	—	—	—	近代、酸化コバルト
遺構外	81	6	磁器	碗	—	—	—	—	—	—	—	近代、酸化コバルト、銅酸塩写
遺構外	82	6	磁器	皿	—	—	(10.5)	—	—	—	—	近代、酸化コバルト、銅酸塩写
遺構外	83	6	ガラス製品	ビン	口縁部	(3.2)	—	(2.3)	淡緑色透明	—	—	史料ビン、スクアエー橙、外面ねじ山あり



第9図 ②区遺構(1)



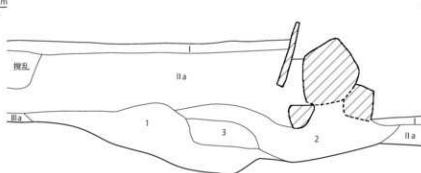
SD1



SD1

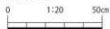
- 1 灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルト 締まりあり 粘性強い 径4cmの礫を1%・粗砂を1%含む [SD1]  
 2 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト 径1cmの礫を1%・粗砂を10%含む [石積み1段目の覆土]  
 3 黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト 径2~3cmの礫を5%・粗砂を50%含む [石積み1段目の覆土]  
 IIa 黒褐色(5YR3/1)粘土質シルト 締まりあり 粘性強い 径1cmの礫を1%・粗砂を3%・炭化植物を1%含む 炭化成分が混じる

434.0m

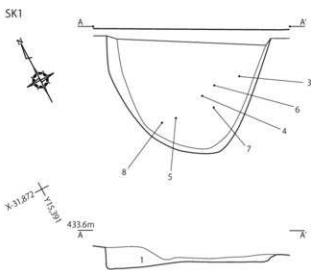


SD1

- 1 表土 [7月下旬]  
 IIa にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト 締まりあり 粘性強い 径2cmの礫を1%・粗砂3%含む [水田床土]  
 IIIa 黒褐色(5YR3/1)粘土質シルト 締まりあり 粘性強い 径1cmの礫を1%・粗砂を3%・炭化植物を1%含む 炭化成分が混じる  
 1 灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルト 締まりあり 粘性強い 径4cmの礫を1%・粗砂を1%含む [SD1]  
 2 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト 径1cmの礫を1%・粗砂が10%含む [石積み1段目の覆土]  
 3 黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト 径2~3cmの礫が5%・粗砂が50%含む [石積み1段目の覆土]

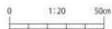


SK1



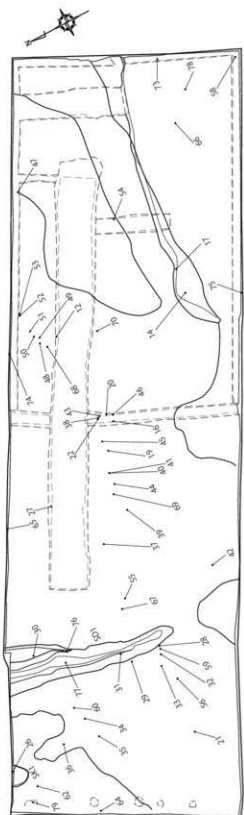
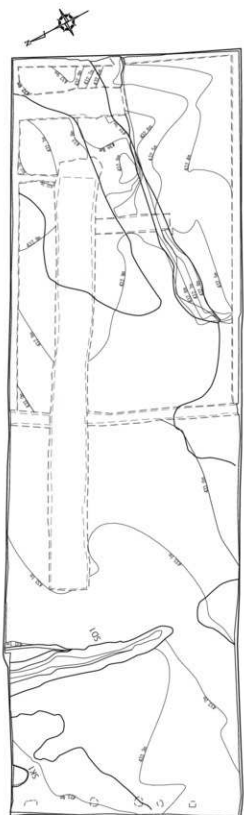
SK1

- 1 黒褐色(7.5YR3/1)粘土質シルト 径2~4cmの礫を1%・粗砂を10%含む



第11図 ②区遺構(3)





第12图 ②区遺構(4)

た摘みはない。56は石鏝である。先端部はやや欠けている。基部は凹基無茎で、右脚部が折損している。

57は古墳時代の土師器と思われる。丸底壺底部と考えられる。58は須恵器である。壺と思われる。57・58は中期と思われる。59は灰釉陶器の境である。胴部外面の下部に回転ヘラケズリがみえる。60～65は平安時代の土師器である。60・61は坏の口縁部である。9世紀代と思われる。62・63は玉緑の坏口縁部である。10世紀代と考えられる。64は坏の底部である。胴部外面の下部に回転ヘラケズリがみえる。10世紀代と思われる。65は皿の口縁部である。11世紀代と思われる。66は青磁である。外面に蓮弁文のある碗と思われる。67～72は中世の土器である。67は内耳鍋の口縁部である。内面に把手の剥がれた跡がみえる。68は鍋と思われる。69は甕と思われる。70は土師質土器と思われる。71は鉢の底部である。胴部外面にケズリ、内面に指押さえがみられる。72は鉢と思われる。

73は近世の磁器である。青磁釉の香炉口縁部である。74～77は陶器である。74は志野の皿底部である。75は碗の底部である。外面と高台内が鉄軸、内面は灰軸である。76は鉢の底部と思われる。外面と内面は灰軸、削り出し高台は無軸である。77は肥前の京焼風陶器の皿と思われる。高台は無軸である。78は土器の皿口縁部である。79は文久永宝である。ブドウ棚支柱アンカーの攪乱から出土している。80～82は近代の磁器である。80は碗である。酸化コバルトを用いた絵付である。81は碗、82は皿である。酸化コバルトを用いた銅版転写による絵付である。83は淡緑色透明のガラスビンである。スクリュー栓で外面にねじ山がみえる。染料ビンと考えられる。

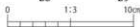
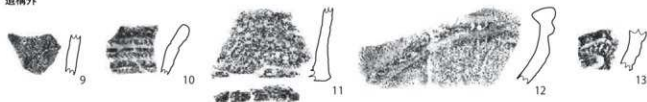
SD1



SK1



遺構外



第13図 ②区出土遺物(1)

遺構外



第14图 ②区出土遗物(2)

#### 第4節 ③区

③区はF3～C4グリッドに位置する。調査区全体の中では②区の西で④区の東に位置し、標高が三番目に高い調査区である。現況はコンクリート舗装の道路と二段のブドウ畑である。現地表面は下段の畑が標高439.0m、道路が439.5m、上段の畑が440.0mである。ブドウ畑は果樹栽培以前は水田であり、上段の畑では厚さ40cm～60cm、下段の畑では厚さ15cm～25cmの床土が認められる。

上段では水田床土の下に遺物包含層を検出した。検出範囲は南東部のみで、他の部分では明褐色の地山が露出した。地山面は標高439.2m～439.6mで北西から南東へ下る傾斜地である。遺物包含層は地山の低い部分でのみ厚さ10cm～15cmで堆積していることが確認された。また、地山中央部に傾斜に沿う方向の窪みが認められた。窪み付近には20cm～40cm大の礫がまとまって露出していた。一時的な流水により地山が掘り込まれ、礫の頭が洗い出されたと思われる。遺物包含層はこの窪みにも堆積していた。

下段では床土の下に遺物包含層がなく、全面で地山を検出した。地山面は標高438.8mの高さでほぼ水平に検出された。水田造成時に削平されたと考えられる。

遺構は道路1条(SF1)を検出した。遺物は遺構から主に近代の磁器・ガラス製品が出土している。遺物包含層からは縄文土器が出土している。

#### 【道路】

##### SF1 (第15～17図、図版6～8、表4)

調査区中央の現況道路と重複して位置する。道路遺構は現況道路の厚さ10cm～15cmのコンクリートを剥がし、その下の厚さ10cmの砕石層を掘り下げて検出した。検出範囲で長さ4.6m、幅0.8m～0.9m。北側と南側は調査区外へ延びる。路面西側は幅0.5mの浅い溝となる。東側は切り土されている。切り土の上部にあたる路面東縁には石列がある。道路は直線的で方向はN-30°Eである。路面の傾斜は北から南へ下っている。現況道路では、この傾斜は20mほど南の流路に架かる橋まで下っている。この傾斜は、上段の地山に見られる水田造成以前の旧地形の傾斜方向と見合っている。

路面東縁に並ぶ石列は、上に重なる現況道路で測ると西端から1.1m、東端から1m程に位置し、道路幅のほぼ中央に並んでいる。石列の並ぶ方向は現況道路と同じN-30°Eである。石の大きさは30cm～50cmで8個検出した。8個の内、南側の2個は並びが乱れている。精査の後、2個の石は埋設された水道管の上にあることが分かり、水道管敷設時に位置が動いていると考えられる。整列する6個の石の間隔は北から60cm、60cm、90cm、60cm、60cmである。石の形状は様々であるが、いずれも平らな面を上にして並べられている。石の上面の高さは北から標高439.50m、439.48m、439.45m、439.44m、439.42m、439.40m、439.49m、439.42mである。見た目にはほぼ水平であるが、整列する6個の石は道路の傾斜と符合して北から南に下がっている。石列の上面は地面よりも5cmほど飛び出るように据えられている。列を乱した2個の内、一番南の石は平らな面が斜めになり水道管理設土中に潜り込んでいた。当初は平らな面が上面として据えられていたものと思われる。南から2番目の石は平らな面が上面として据えられているが、掘削内にあるため元の高さをとどめていないと考えられる。

路面西側の溝は幅0.5m、深さ5cmで、断面は浅く広がる形状である。底面の傾斜は道路面と同じく、北から南へ下っている。現況道路でも雨天時にはコンクリート舗装上で道路西端に雨水が集まり、北から南へと流れるみず道ができることが観察されている。

路面東側は切り土されている。切り土は北側は斜面、南側は段になり形状が異なっている。北側では路面東縁から幅90cm、深さ60cmほどを斜めに切り土をしている。これに対し中央から南側は路面東縁から垂直に掘り込み幅60cmほどの中段が設けられている。段上の覆土からは40cm大の石積みを使用されるような石が出土している。

切り土の末端には石積みがあり、その東側は水平に地山が削平されている。石積みはコンクリートで塗り

こめられて現況道路の擁壁となっている。擁壁のコンクリートは中央上部から南の下部にかけて縦じまが見られる。切り土の中段とコンクリートの縦じまラインが対応することから道路面から斜めに下る降り口と考えられる。

出土地点を記録した遺物は93点で、その内の15点を図示した。1は磁器の筒形碗である。染付による文様が見られる。肥前。2は磁器の丸碗である。酸化クロムを用いたゴム版による絵付と呉須を用いた手書きの圏線が併用されている。3は磁器の丸碗である。酸化コバルトを用いた型紙摺りによる絵付である。内面には環状文が見られる。4・5は磁器の丸碗である。酸化コバルトを用いた型紙摺りによる絵付である。6は磁器の皿である。口縁部は輪花形と思われる。酸化コバルトを用いた型紙摺りによる絵付である。7は磁器香炉である。酸化コバルトを用いたゴム版による絵付である。8は磁器の蓋である。外面のみ施軸され、内面および口唇部は無軸である。合子状の容器と考えられる。9はガラスの葉ビンである。青色透明の丸ビンで胴部の表裏に「神葉」「葉王堂」と陽刻がある。10はガラスの葉ビンである。青色透明の丸ビンで胴部の表に「霊神葉」、右横に目盛りの陽刻がある。11はガラスの葉ビンである。青色透明の丸ビンで胴部に目盛りの陽刻がある。12はガラスの葉ビンである。茶色透明の丸ビンで胴部に目盛りの陽刻がある。13はガラスの丸ビンである。茶色透明で底部に陽刻がある。14はガラスのおはじきである。青色透明である。15は煙管の吸口である。1は18世紀末、2～14は近代、15は18世紀後半以降と考えられる。

#### 遺構外出土遺物（第15・17図、図版6・8、表4）

遺構外出土遺物は水田床土の最下部から土器が1点、黒褐色の遺物包含層から縄文土器が5点出土している。16は土器で、火鉢類と思われる。17～21は縄文土器である。18は縄文が見える。単節縄文と思われる。

表4 ③区遺物観察表

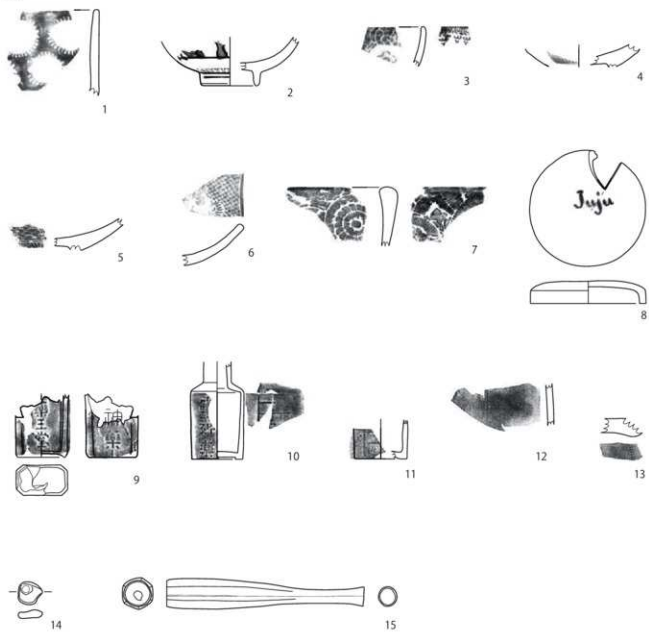
※数値単位はcm、(数値)は復元・残存値

遺構名	遺物番号	写真図版番号	種別	器種	部位	口径 / 長	底径 / 幅	器高 / 厚	色調	焼成	胎土	備考
SF1	1	7	磁器	碗	口縁～胴部	—	—	(4.5)	—	—	—	筒形碗
SF1	2	7	磁器	碗	底部破片	—	(2.8)	(2.6)	—	—	—	良須：手書き、酸化クロム：ゴム版
SF1	3	7	磁器	碗	口縁部	—	—	(2.1)	—	—	—	酸化コバルト、型紙摺り
SF1	4	7	磁器	碗	底部	—	—	(1.2)	—	—	—	酸化コバルト、型紙摺り
SF1	5	7	磁器	碗	底部	—	—	(1.6)	—	—	—	酸化コバルト、型紙摺り
SF1	6	7	磁器	皿	口縁部破片	—	—	(2.2)	—	—	—	酸化コバルト、型紙摺り
SF1	7	7	磁器	香炉	口縁部破片	—	—	(3.1)	—	—	—	酸化コバルト、ゴム版
SF1	8	7	磁器	蓋	ほぼ完形	6.1	—	1.2	—	—	—	合子状容器の蓋、下給付「jij」, 内面無軸
SF1	9	7	ガラス製品	葉ビン	胴～底部	—	2.7×1.6	(3.4)	青色透明	—	—	陽刻「神葉」・「葉王堂」、丸ビン
SF1	10	7	ガラス製品	葉ビン	胴～底部	—	(2.7)	(5.2)	青色透明	—	—	陽刻「霊神葉」、目盛り、丸ビン
SF1	11	7	ガラス製品	葉ビン	胴～底部	—	(2.8)	(2.1)	青色透明	—	—	陽刻目盛り、丸ビン
SF1	12	7	ガラス製品	葉ビン	胴部破片	—	—	(2.2)	茶色透明	—	—	陽刻目盛り、丸ビン
SF1	13	7	ガラス製品	ビン	底部破片	—	—	(0.9)	茶色透明	—	—	底部に陽刻
SF1	14	7	ガラス製品	おはじき	完形	1.3	1.2	0.5	青色透明	—	—	—
SF1	15	7	金属製品	煙管	吸口	6.9	1.1	1.1	—	—	—	小口径9mm、口付径7mm、重量9.6g
遺構外	16	7	土器	火鉢類	—	—	—	—	黒褐色10YR3/2	良好	—	細砂粒・石英・白色粒
遺構外	17	7	縄文土器	—	—	—	—	—	橙色7.5YR6/6	良好	—	細砂粒・長石・石英・白色粒
遺構外	18	7	縄文土器	—	—	—	—	—	橙色7.5YR6/6	良好	—	細砂粒・長石・石英・白色粒・金色雲母
遺構外	19	7	縄文土器	—	—	—	—	—	橙色7.5YR6/6	良好	—	細砂粒・長石・石英・白色粒
遺構外	20	7	縄文土器	—	—	—	—	—	橙色5YR6/8	良好	—	細砂粒・長石・石英・白色粒
遺構外	21	7	縄文土器	—	—	—	—	—	橙色5YR6/8	良好	—	細砂粒・長石・石英・白色粒

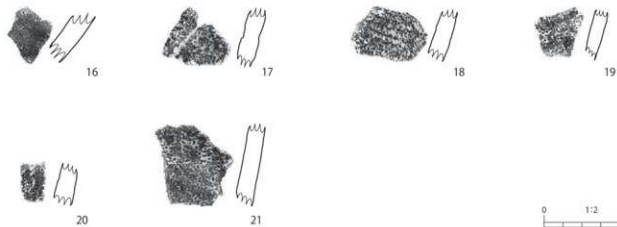




SF1



遺構外



第 17 图 ③区出土遗物 (1)



## 第5節 ④区

④区はA1～C2グリッドに位置する。調査区全体の中では一番西に位置し標高が最も高い調査区である。現況は果樹が栽培される二段の畑地である。上段はブドウ畑、下段は元ブドウかモモの畑で現在は耕作していない。調査区北側と東側には水路が巡っている。果樹栽培以前は水田であり、傾斜地に厚さ30cm～60cmの床土を入れて、石積みの土留めをすることで水田面を作っている。現地表面は上段が標高442.5m～442.6m、下段が441.9m～442.0mで二段ともほぼ水平である。水田床土の下が厚さ10cm～15cmの遺物包含層、その下が遺構確認面である。遺構確認面は標高441.3m～441.9mで西から東へ下る傾斜の中に、北から南へ下る微地形が認められる。最も高い北西部では遺物包含層が検出されず、水田造成時に削平されたと考えられる。

遺構は溝3条(SD1～3)、土坑1基(SK1)、ピット6基(Pit1～6)を検出した。遺物は遺構および遺物包含層から主に縄文土器が出土している。

### 【溝】

#### SD1 (第18・19・21・22図、図版8・9、表5)

調査区南側に位置する。検出範囲で長さ13.5m、幅0.8m～2.1m、深さ10cm～15cm。南側と東側は調査区外へ延びる。西側はSD2と重なり、SD1の方が新しい。直線的な溝で方向はN-70°Wである。底面の傾斜は西から東へ下っている。

出土地点を記録した遺物は14点で、全点を図示した。1～14は縄文土器である。1～3は口縁部である。3は隆帯を円弧状に貼り付け中心部が穴となっている。中期中葉と考えられる。4は胴部で綾杉文状の斜位の集合沈線がみられる。中期と考えられる。

#### SD2 (第18・19・21・22図、図版8・9、表5)

調査区南側に位置する。検出範囲で長さ1m、幅0.7m、深さ60cm～70cm。南側は調査区外へ延びる。東側はSD1と重なり、SD2の方が古い。直線的な溝で方向はN-30°Eである。底面の傾斜は北から南へ下っている。

出土地点を記録した遺物は4点で、その内の3点を図示した。15～17は縄文土器である。15は深鉢胴部である。横方向の平行沈線が何条かみられる。前期後半、諸磯b式と考えられる。

#### SD3 (第18・19・21・22図、図版8・9、表5)

調査区中央に位置する。検出範囲で長さ19.5m、幅1m～2.5m、深さ20cm～35cm。北側と東側は調査区外へ延びる。東側はSD1と重なり、SD3の方が古い。蛇行する溝で方向はN-60°Wである。底面の傾斜は西から東へ下っている。

出土地点を記録した遺物は6点で、全点を図示した。18～23は縄文土器である。18は縦位の集合沈線がみえる。中期後半、曾利式と考えられる。19は後期初頭、瓢形の注口土器と考えられる。

### 【土坑】

#### SK1 (第18・20・21図、図版8・9、表5)

調査区中央に位置する。長さ80cm、幅75cm、深さ25cm。平面は円形、断面は平らな底面から緩やかに壁が立ち上がる。遺物は出土していない。

### 【ピット】

#### Pit1 (第18・20・21図、図版8)

調査区南東側のSD1底面に位置する。長さ20cm、幅20cm、深さ22cm。平面は円形、断面は丸い底面から垂直に壁が立ち上がる。遺物は出土していない。

#### Pit 2 (第18・20～22図、図版8・9、表5)

調査区南東側のSD1とSD3の間に位置する。長さ30cm、幅26cm、深さ5cm。平面は円形、断面は丸い底面である。出土地点を記録した遺物は1点で、一括遺物も含め3点を図示した。24～26は縄文土器である。

#### Pit 3 (第18・20・21図、図版8)

調査区南東側のSD1底面に位置する。長さ22cm、幅20cm、深さ33cm。平面は円形、断面は平らな底面から細長くハの字に開いて壁が立ち上がる。遺物は出土していない。

#### Pit 4 (第18・20・21図、図版8)

調査区南東側のSD1底面に位置する。長さ45cm、幅40cm、深さ14cm。平面はやや不整な円形、断面は平らな底面から垂直気味に壁が立ち上がる。遺物は出土していない。

#### Pit 5 (第18・20・21図、図版8)

調査区北東側に位置する。長さ28cm、幅27cm、深さ10cm。平面は円形、断面は丸い底面から垂直気味に壁が立ち上がる。遺物は出土していない。

#### Pit 6 (第18・20・21図、図版8)

調査区北東側に位置する。長さ31cm、幅25cm、深さ11cm。平面は楕円形、断面は平らな底面から垂直気味に壁が立ち上がる。遺物は出土していない。

#### 遺構外出土遺物 (第21・22図、図版9、表5)

遺構外出土遺物は遺構確認面上の黒褐色の遺物包含層から出土している。出土遺物は縄文土器が大半を占め、黒曜石の剥片も1点出土している。出土地点を記録した遺物は21点で、一括取り上げ遺物も含めて24点図示した。27～50は縄文土器である。27は内湾する口唇部である。28は胴部地文に無節縄文Rが見える。中期中葉と考えられる。29・30は縦位の集合沈線が見える。中期後半、曾利式と考えられる。33・34は斜位の沈線が見える。46は底部である。47は口唇が肥厚する口縁部である。横位の沈線が見える。後期初頭と考えられる。48は横位の沈線の下にL字に屈曲する沈線が見られ、J字文と思われる。後期初頭と考えられる。49・50は太い沈線がみられる。後期と考えられる。

表5 4区遺物観察表

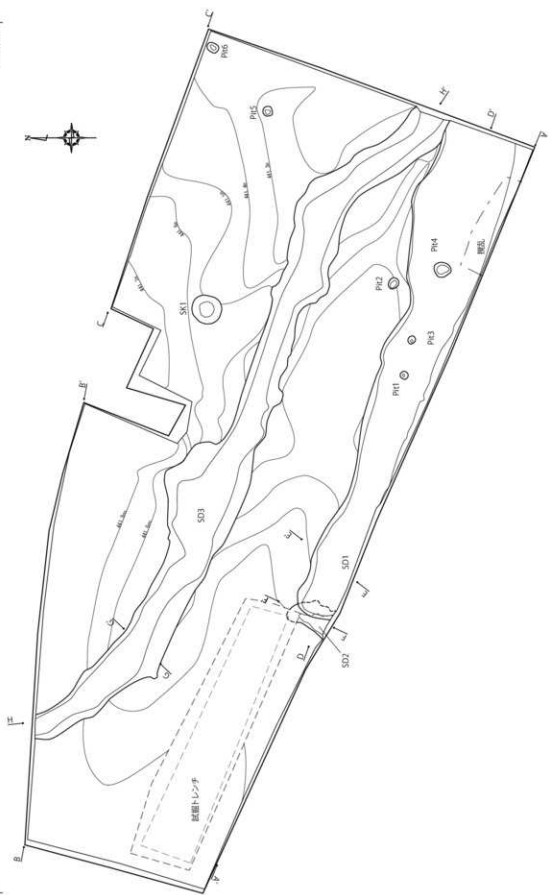
※数値単位はcm、(数値)は復元・残存数

遺構名	遺物番号	写真図版番号	種別	器種	部位	口径 / 長	底径 / 幅	器高 / 厚	色調	焼成	胎土	備考
SD1	1	9	縄文土器	—	口縁部	—	—	—	明黄褐色2.5Y7/6	良好	細砂粒・長石・石英・金色雲母	
SD1	2	9	縄文土器	—	口縁部	—	—	—	褐色7.5YR7/6	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒・黒色粒・金色雲母	
SD1	3	9	縄文土器	—	口縁部	—	—	—	赤褐色5YR4/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒・黒色粒	隆帯円弧状、中期中葉
SD1	4	9	縄文土器	—	胴部	—	—	—	明赤褐色2.5YR5/6	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒・黒色粒	綾杉文状斜位集合沈線、中期
SD1	5	9	縄文土器	—	—	—	—	—	褐色5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英	
SD1	6	9	縄文土器	—	—	—	—	—	明褐色7.5YR5/8	良好	細砂粒・長石・石英	
SD1	7	9	縄文土器	—	—	—	—	—	赤褐色2.5YR4/6	良好	細砂粒・石英・白色粒・赤色粒	

※数値単位はcm、(数値)は復元・残存値

遺構名	遺物番号	写真図版番号	種別	器種	部位	口径/長	底径/幅	器高/厚	色調	焼成	胎土	備考
SD1	8	9	縄文土器	—	—	—	—	—	明赤褐色5YR5/6	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒・黑色粒	
SD1	9	9	縄文土器	—	—	—	—	—	橙色7.5YR6/6	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	
SD1	10	9	縄文土器	—	—	—	—	—	明黄褐色10YR7/6	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	
SD1	11	9	縄文土器	—	—	—	—	—	橙色2.5YR5/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	
SD1	12	9	縄文土器	—	—	—	—	—	明赤褐色5YR5/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	
SD1	13	9	縄文土器	—	—	—	—	—	明赤褐色5YR5/8	良好	細砂粒・長石・石英	
SD1	14	9	縄文土器	—	—	—	—	—	明赤褐色5YR5/6	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	
SD2	15	9	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	—	橙色5YR6/8	良好	粗砂粒・長石・石英・白色粒	横位平行沈線、前期後半、灰燼b
SD2	16	9	縄文土器	—	—	—	—	—	橙色5YR6/6	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	
SD2	17	9	縄文土器	—	—	—	—	—	明赤褐色5YR5/8	良好	細砂粒・長石・石英	
SD3	18	9	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	—	にぶい、黄色2.5Y6/4	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	縦位集合沈線、中期後半、貫利
SD3	19	9	縄文土器	注口土器	胴部	—	—	—	橙色7.5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	瓢形、後期初頭
SD3	20	9	縄文土器	—	—	—	—	—	黄褐色10YR7/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	
SD3	21	9	縄文土器	—	—	—	—	—	橙色5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英	
SD3	22	9	縄文土器	—	—	—	—	—	黄褐色10YR7/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	
SD3	23	9	縄文土器	—	—	—	—	—	橙色5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	
Ph2	24	9	縄文土器	—	—	—	—	—	明赤褐色5YR5/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	
Ph2	25	9	縄文土器	—	—	—	—	—	明赤褐色2.5YR5/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	
Ph2	26	9	縄文土器	—	—	—	—	—	橙色5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	
遺構外	27	9	縄文土器	—	口縁部	—	—	—	明黄褐色10YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英	
遺構外	28	9	縄文土器	—	胴部	—	—	—	橙色7.5YR7/6	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	縦筋縄文R、中期中葉
遺構外	29	9	縄文土器	—	—	—	—	—	にぶい、黄褐色10YR6/4	良好	細砂粒・長石・石英・金色雲母	縦位集合沈線、中期後半貫利
遺構外	30	9	縄文土器	—	—	—	—	—	橙色5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	縦位集合沈線、中期後半貫利
遺構外	31	9	縄文土器	—	—	—	—	—	橙色7.5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	
遺構外	32	9	縄文土器	—	—	—	—	—	黄褐色10YR7/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒・赤色粒	
遺構外	33	9	縄文土器	—	胴部	—	—	—	橙色7.5YR7/6	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	斜位沈線
遺構外	34	9	縄文土器	—	胴部	—	—	—	明褐色7.5YR5/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	斜位沈線
遺構外	35	9	縄文土器	—	—	—	—	—	橙色7.5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	
遺構外	36	9	縄文土器	—	—	—	—	—	橙色5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	
遺構外	37	9	縄文土器	—	—	—	—	—	明褐色7.5YR5/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒・金色雲母	
遺構外	38	9	縄文土器	—	—	—	—	—	黄褐色10YR7/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	
遺構外	39	9	縄文土器	—	—	—	—	—	橙色7.5YR6/6	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	
遺構外	40	9	縄文土器	—	—	—	—	—	橙色7.5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒・金色雲母	
遺構外	41	9	縄文土器	—	—	—	—	—	橙色7.5YR7/6	良好	細砂粒・長石・石英	
遺構外	42	9	縄文土器	—	—	—	—	—	橙色7.5YR7/6	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒・赤色粒	
遺構外	43	9	縄文土器	—	—	—	—	—	橙色7.5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	
遺構外	44	9	縄文土器	—	—	—	—	—	橙色5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	
遺構外	45	9	縄文土器	—	—	—	—	—	橙色5YR7/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	
遺構外	46	9	縄文土器	深鉢	底部	—	—	—	明褐色7.5YR5/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	
遺構外	47	9	縄文土器	—	口縁部	—	—	—	明赤褐色5YR5/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	口唇肥厚、横位沈線、後期初頭
遺構外	48	9	縄文土器	—	—	—	—	—	橙色7.5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	太い沈線、J字文、後期初頭
遺構外	49	9	縄文土器	—	—	—	—	—	橙色7.5YR6/8	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	太い沈線、後期
遺構外	50	9	縄文土器	—	—	—	—	—	褐色7.5YR4/6	良好	細砂粒・長石・石英・白色粒	太い沈線、後期

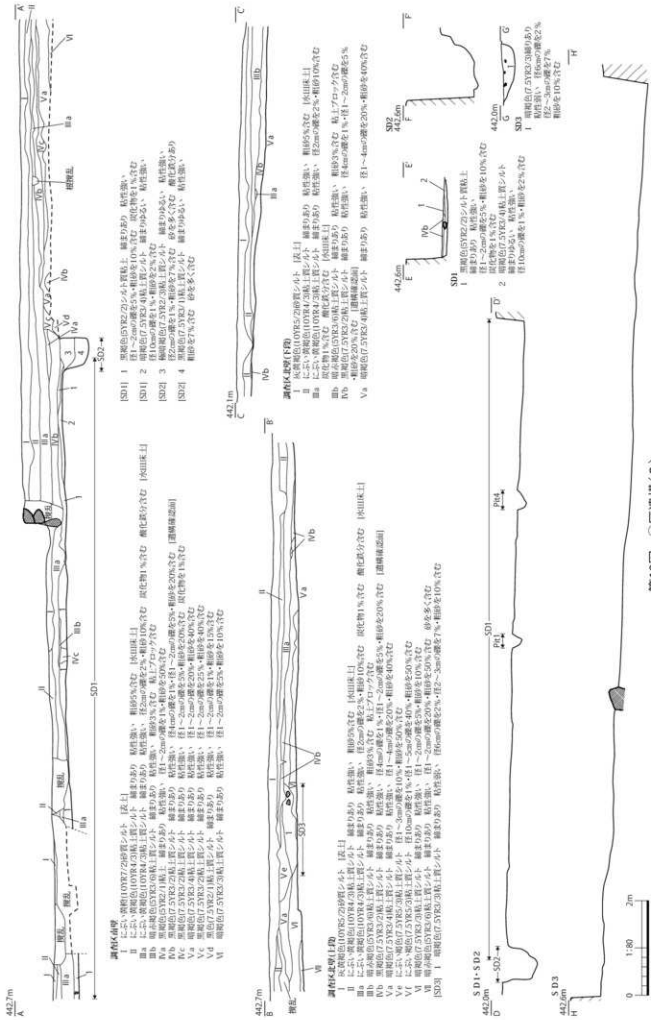
Y15,255  
X-31,802



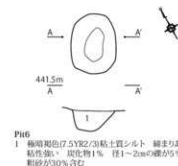
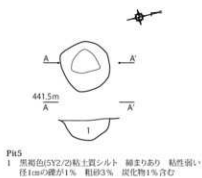
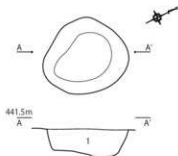
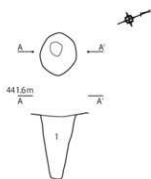
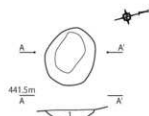
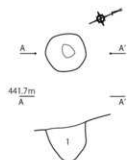
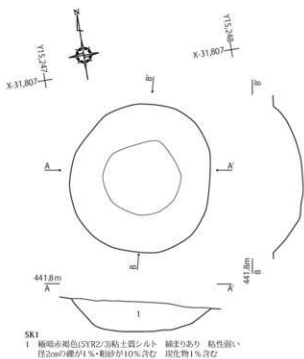
Y15,232  
X-31,802



第18図 ④区遺構(1)



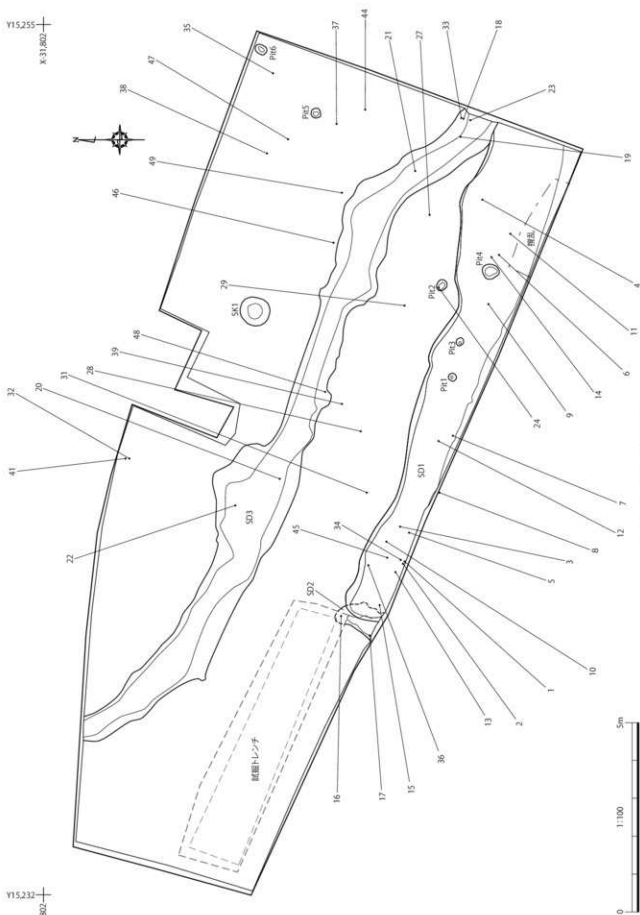
第19図 ④区遺構(2)



第20図 ④区遺構(3)

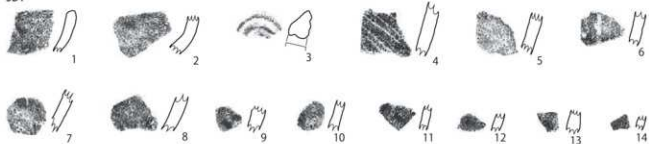
Y15,232  
X-31,802

Y15,255  
X-31,802

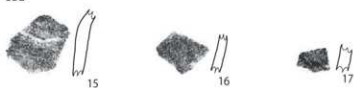


第21図 ④区遺構(4)

SD1



SD2



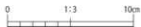
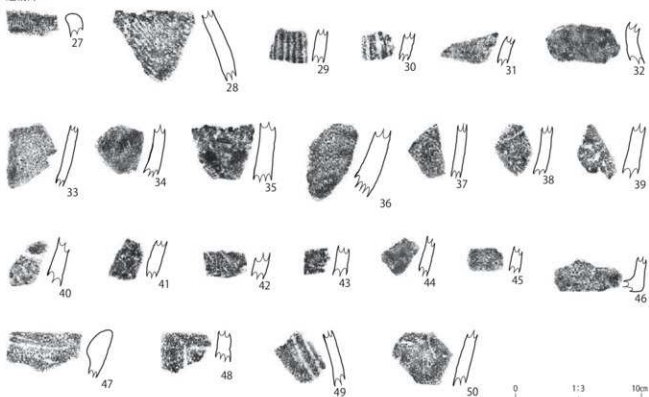
SD3



Pit2



遺構外



第 22 图 ④区出土遺物



## 第5章 まとめ

### 第1節 ①区

①区の調査においては、溝を5条検出した。また、調査区中央一体で水田を3層検出している。このうち最上部の水田層については近代以降の水田であるが、2層目および3層目の水田は検出した溝に付随するものである。これらの溝の形成過程については、

- (1). 3層目の水田およびSD2、3の形成
- (2). (1)の廃絶後、2層目の水田およびSD1の形成
- (3). (2)の廃絶後、1層目の水田の形成

となる。

いずれの溝からも時期を特定できるような遺物は出土していないが、水田2層目と3層目から土師器やかわらけが出土していることから、水田及び溝は平安～中世のものである可能性が高い。

また、SD4は既存石垣が形成される以前のものであり、既存石垣が八幡条里の軸線と一致しているのに対し、溝残存部の軸線は八幡条里の軸線と異なることから条里形成以前の溝である可能性がある。

溝及び水田が検出されたのは調査区内でもごく一部であり、今回の調査だけでは八幡条里の成立した時期等を推定する手がかりを得ることはできなかったが、今後の参考資料とした。

### 第2節 ②区～④区

②区(堰間遺跡)では溝1条(SD1)、土坑1基(SK1)を検出した。遺物は主に包含層から出土しており、縄文土器・石器、古墳時代・平安時代の須恵器・土師器、灰釉陶器、中世～近代の土器・陶磁器、古銭、ガラス製品が出土した。縄文土器は前期初頭、前期後半諸磯b式、中期初頭五領ヶ台式、中期中葉藤内・井戸尻式、中期後半曾利式、後期初頭のものが出土している。SD1からは中世のかわらけと、近世の磁器が出土している。SK1から縄文土器の小破片が出土している。

③区(大工北遺跡)では道路1条(SF1)を検出した。遺物は主に道路から出土し近代の物が主体であった。近世・近代の磁器・金属製品・ガラス製品が出土し、縄文土器も少量出土した。近世末から近代にかけて半間程の道幅を倍の1間に拡幅し、現在の2m幅の道路へと至っていることが分かった。

④区(大工北遺跡)では溝3条(SD1～3)、土坑1基(SK1)、ピット6基(Pit1～6)を検出した。遺物は縄文土器が出土した。SD1から中期中葉、SD2から前期後半諸磯b式、SD3から中期後半曾利式、後期初頭のものが出土している。

今回の調査は八幡条里内を東西に横断する道路建設に伴い遺構・遺物の記録保存を行うことを目的としたものであった。八幡条里の基軸線は八幡地区東端の窪八幡神社と西端の天神社を結ぶ線とみられ、並行式坪並の条里とみられている(第23図)。大工地区の一丁田を「里」の北西端に配した場合、上神内川地区の一丁田がほぼ「里」の北西端に配置されることから「条」と「里」の配置が復元されている。仮に大工地区の一丁田を「1条1里」の「1坪」とすると上神内川地区の一丁田は「4条4里」の「1坪」という位置関係である。

また大工地区の一丁田と八反田の数字から八幡条里の坪配置は並行式坪並と推定されている。今回の調査区をこの坪配置から推定すると、調査範囲は「里」の南端の一行に並んで位置することになる。①区は「24坪」の北側中央、②区は「24坪」の北側で「18坪」と隣接する部分、③区は「12坪」と「18坪」の境界、④区は「12坪」の北側中央である。

また、1坪の中の1枚毎の水田の形は微地形の影響を受けて不整系となっているものも多く見られるが、「坪」の中の「段」の配置は半折型と考えられる。「坪」の中を流れる水路の流れが地形に沿って斜めにも流

れてはいるが、どの「坪」でもほぼ中央を水路が横断する箇所が設けられており、調査区内でも半折型と考えられる地割を確認できる（第24図）。

そして、本来は「6町」四方に「36坪」並ぶ「里」であるが、調査区が位置する「里」の坪並は「6坪」「12坪」「18坪」「24坪」「30坪」「36坪」が並ぶ南端の1列しか実在はしないと考えられる。八幡地区の谷底平野の台地上は約東西2km、南北0.6kmほどの規模を持つため、規格上は東西に3列、南北に1列ほどの「里」が設定できると思われる。しかし、基軸線である窪八幡神社—天神社ラインは「条里」の区画方向を規定するばかりでなく、「里」の境界線となることで、区画線の南北方向の位置も規定している。このため、「里」の南および北の境界線は台地の縁とは重ならず、台地のほぼ中央を通っており、台地上の「里」は二つの「条」が設定されている。したがって地形の制約上で実際には耕地として区画設定していない坪並が存在することになったと考えられる。このことはまた、条里制の規格が収獲した耕作物を租税として徴収することを目的としたため、実質的に重要なのは「段・坪」の規格であり、「条・里・坪並」は位置を示すために必要としたものであったと考えられる。

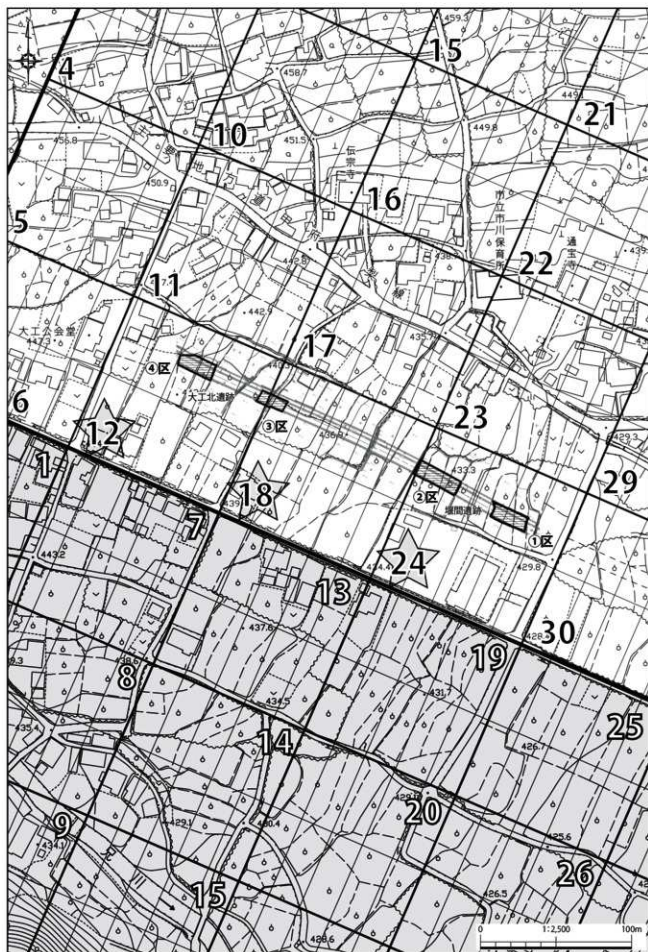
条里地割境界は成立時期から現代まで道路、水路、地境として継続しており、その位置が概ね重複していると考えられる。このことから課題であった、現況の構造物の下から壊れずに残った遺構を検出することに関しては、③区の調査で条里地割境界である道路の近代以前の状況を把握することができた。ただし、遺構が道路ということもあり、道路遺構の使用時期の下限が近世末から近代であることは判断できるが上限の時期を示す遺物を特定することができなかった。

③区以外の地区に関しても調査範囲が条里地割内の水田に当たる範囲となることから、多くの遺物を検出するに至らず、荘園の区画として成立したと考えられる条里成立時期の手掛かりとなる遺物を検出することは難しかった。しかし、少量ではあるが平安時代末から中世の遺物が出土していることから、八幡条里が中世の安田氏による荘園の条里として、安田義定の勢力下で12世紀初頭に古代からの条里地割を再編し成立したとされる推定に見合う結果を得ることができた。

#### 参考文献

- 山梨県 1998 『山梨県史 資料編1 原始・古代1考古（遺跡）』
- 山梨県 2004 『山梨県史 通史編1 原始・古代』
- 山梨市 2004 『山梨市史 史料編 近世』
- 山梨市 2005 『山梨市史 資料編 考古・古代・中世』
- 山梨市 2005 『山梨市史 文化財・社寺編』
- 山梨市 2007 『山梨市史 通史編 上巻』





第24図 八幡条里坪配置推定



①区・②区 調査前風景 東から



①区・②区 調査風景 東から



①区・②区 調査風景 西から



①区・②区 調査風景 真上から (上が北)



③区・④区 調査前風景 東から



③区・④区 調査風景 東から



③区・④区 調査風景 西から



③区・④区 調査風景 真上から (上が東)

図版 2



①区 T1 完掘 西から



①区 T2 完掘 東から



①区 T3 遺構検出状況 東から



①区 T3 完掘 東から



①区 T3 遺構検出状況 西から



①区 T3 SD4 土層堆積状況 南から



①区 T3 SD4 完掘 南から



①区 T3 SD4 完掘 東から



①区 T3 SD1 完照 北から

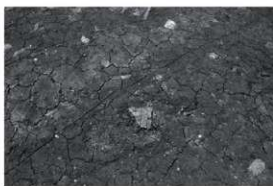
①区 T3 SD2 検出状況 東から

①区 T3 SD3 検出状況 東から

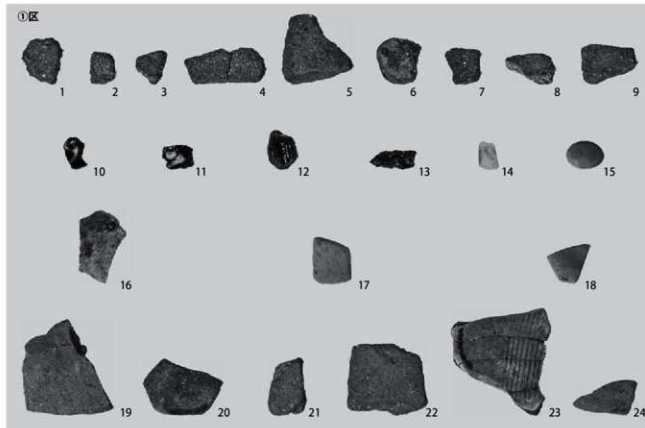
①区 T3 SD4 検出状況 南から



①区 T3 SD2 土層堆積状況 東から

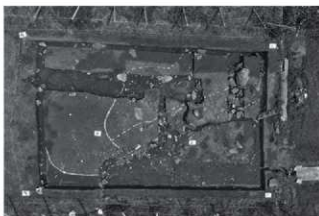


①区 T3 遺物出土状況 東から





②区上段 完掘 真上から（上が北）



②区下段 完掘 真上から（上が北）



②区上段 完掘 東から



②区下段 完掘 東から



②区 遺構検出状況 西から



②区 土層堆積状況 南から



②区上段 SD1 完掘 東から



②区上段 SD1 土層堆積状況 南から





②区下段 土層堆積状況 西から



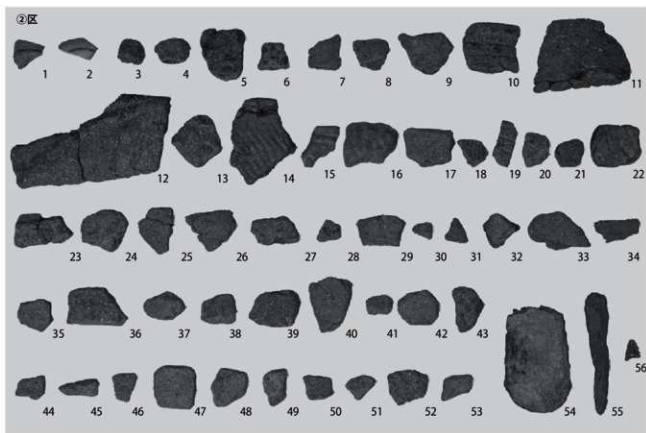
②区下段 巨礫検出状況 西から



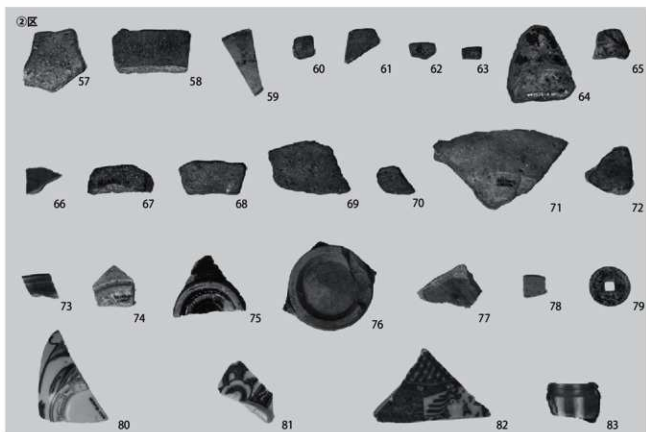
②区 作業風景 西から



②区 作業風景 西から



図版 6



③区 完掘 真上から（上が北）



③区 SF1 完掘 真上から（上が西）



③区上段 完掘 東から



③区 SF1 完掘 北から



③区 SF1 掘り方 東から



③区 SF1 土層堆積状況 南から



③区 SF1 掘り方土層堆積状況 北から



③区 SF1 土層堆積状況 北から



③区 SF1 完掘 東から



③区 SF1 遺物出土状況 北から

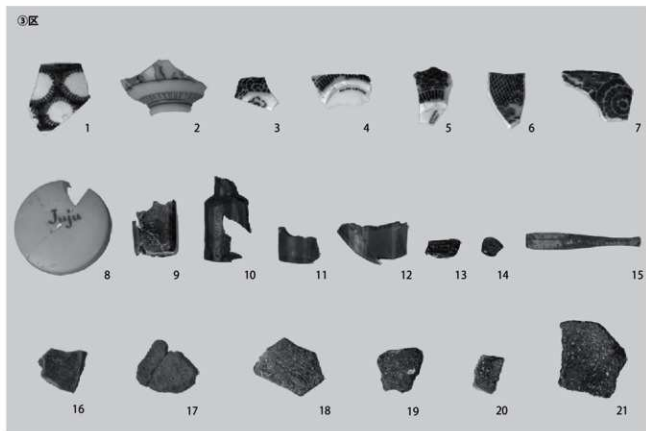


③区 作業風景 北から



③区下段 表土掘削 西から

③区



④区 完掘 真上から (上が北)



④区 完掘 東から



④区上段 遺構検出状況 東から



④区下段 遺構検出状況 西から



④区 SD1 遺物検出状況 北から



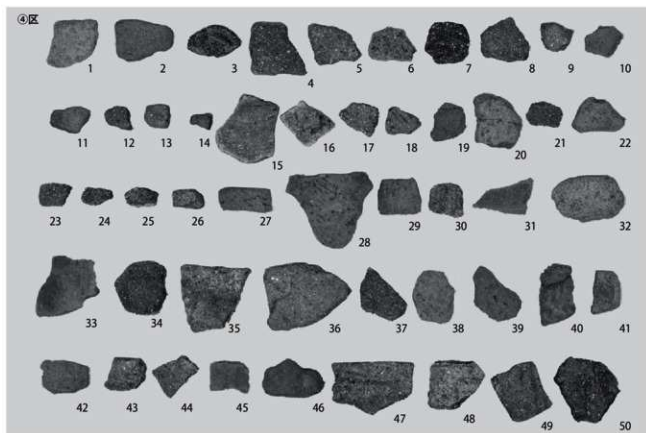
④区 SD2 遺物検出状況 北から



④区 SD3 土層堆積状況 東から



④区 SK1 完掘 南から



## 報告書抄録

ふりがな	だいくきたいせき・せぎまいせき							
書名	大工北遺跡・堰間遺跡							
副書名	主要地方道甲府山梨線バイパス工事に伴う発掘調査報告書							
編著者名	南宮弘聡（山梨市教育委員会） / 高野高潔・浅川晃一（昭和測量株式会社）							
編集機関	山梨市教育委員会 / 昭和測量株式会社							
所在地	〒405-8501 山梨県山梨市小原西 843 ㊟0553-22-1111 〒400-0032 山梨県甲府市中央 3-11-27 ㊟055-235-4448							
発行年月日	西暦 2020（令和2）年 2月 26日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				(㎡)	
だいくきたいせき 大工北遺跡	やまなしけん 山梨県	19205	05007	35°42'46"	138°40'07"	20190506	908	道路建設
せぎまいせき 堰間遺跡	やまなしほりのうち 山梨市堀内 22-3外		05196	35°42'44"	138°40'13"	20190802		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
大工北遺跡	散布地	縄文、平安 中近世、	溝、土坑、 道路	縄文土器、石器、土師器、須恵器、 灰軸陶器、土師質土器、陶器、磁器、 銭貨、金属製品、ガラス製品			八幡条里	
堰間遺跡	集落跡	近代						

### 山梨市文化財調査報告書 第35集

#### 大工北遺跡・堰間遺跡

—主要地方道甲府山梨線バイパス工事に伴う発掘調査報告書—

発行日 令和2年2月26日

編集 山梨市教育委員会

〒405-8501 山梨県山梨市小原西 843 ㊟0553-22-1111

昭和測量株式会社

〒400-0032 山梨県甲府市中央 3-11-27 ㊟055-235-4448

発行 山梨市教育委員会 昭和測量株式会社

印刷・製本 株式会社内田印刷

〒400-0032 山梨県甲府市中央 2-10-18 ㊟055-233-0188